幼児の教育　第94巻　第３号　平成７年３月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1995
3

お茶の水女子大学
平成
7.1.20
受贈
図書室

第94巻　第３号　日本幼稚園協会

フレーベル先生の遺跡と施設をたずねる

ヨーロッパ幼児教育視察

'95年6月27日(火)～7月8日(土)

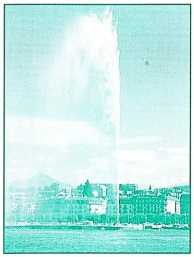
12日間

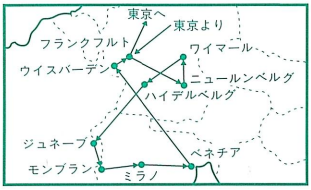
ドイツでは、ロマンチック街道の古都ビュルツブルグ、ローテンブルグを経てニュールンベルグへ。

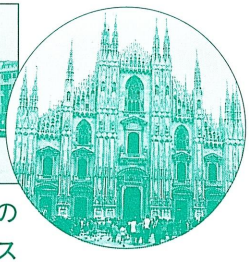
フレーベル先生の遺跡、世界最初の幼稚園の見学の後、学生の町ハイデルベルグへ。

レマン湖のほとりジュネーブを訪れ、モンブラン観光の後アルプスの峠を越えて北イタリア、アオスタ経由ミラノへ。

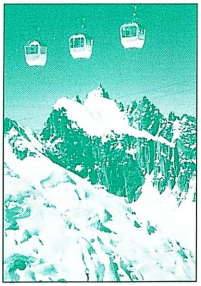
ミラノからベローナを経て水の都ベネチアへ、さよならパーティーは温泉の町ウィスバーデンです。







今年は、幼児教育のルーツを訪ねるとともに、スイスのジュネーブ、そして、ジュネーブよりバスにてアルプス最高峰のモンブランを越え、イタリアのミラノ・ベネチアを訪ねるコースを企画いたしました。



旅行期間：'95年6月27日(火)～7月8日(土)【12日間】

旅行代金：590,000円（おとな１名様）

募集人員：25名（定員になり次第締切らせていただきます）

申込締切日：'95年5月10日(水)

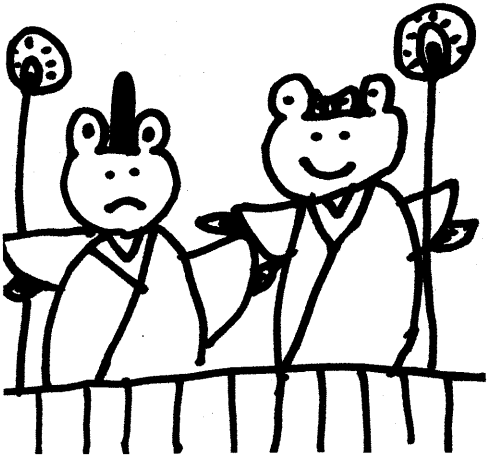
●企画・お問い合わせ：フレーベル館・ヨーロッパ幼児教育視察係
〒113 東京都文京区本駒込6-14-9 ☎ 03-5395-6600（代）

●旅行主催：日本交通公社

全行程に日本交通公社社員が同行致します。

幼児の教育

第94巻　第３号

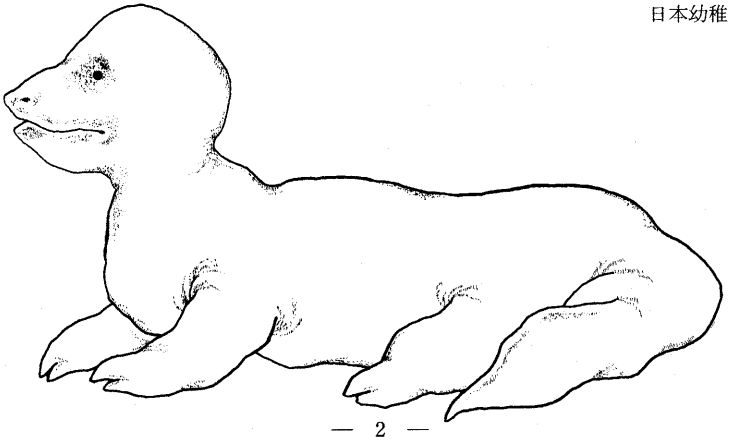


幼児の教育　目次

――第九十四巻　第三号――

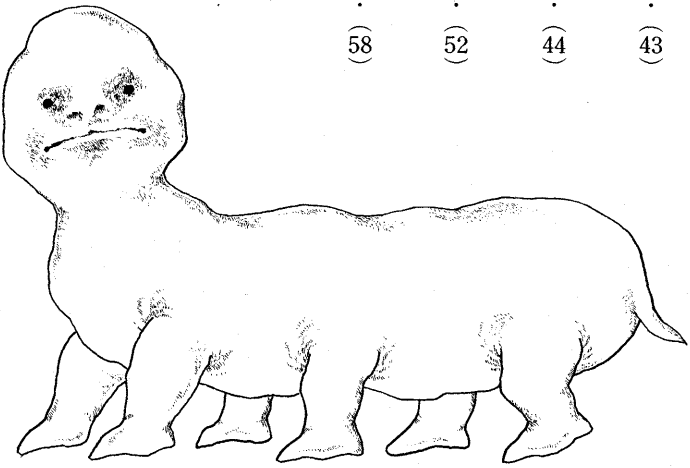
雛に寄せて
附属幼稚園のお雛さまのこと……小林すみ江…（4）
ある日
保育の質について考える……津守　真…（12）
『新しい人よ眼ざめよ』
大江健三郎　ふたたび……本田　和子…（17）
子育てにおける夫婦の連携(6)
夫婦お互いが幸せに生きるために……飯長喜一郎…（24）

© 1995
日本幼稚園協会



あそびの研究(5)　モンゴルの子どもたちの遊び……藤本浩之輔…（32）
ある日の育児日記から(51)……佐藤　和代…（43）
私の子ども時代(6)　大陸で育った私……今井百里江子…（44）
〝人〟との関わり……大下　祥子…（52）
妹の誕生と入園準備……河合　聡子…（58）

表紙・松永　潤二／扉題字・津守　真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・彌永たたえ
編集委員・本田　和子／田代　和美
桝田　正子・田中三保子・伊集院理子
編集部・大沢　啓子



雛に寄せて

附属幼稚園のお雛さまのこと

小林　すみ江

雛まつり――何となつかしい響きの言葉であろう。毎年めぐり来るこの日、女性たちはそれぞれの雛を飾る。ことにその年女児に恵まれた家庭では、その健やかな成長を祈って新しい雛をととのえる。また、すでに子らの巣立った家であっても、小さな土雛に桃の一枝でも添えて卓上に飾れば、もうそれで立派な雛まつり、心は幼女のように華やぎ、思い出はたちまち遠い日へ立ち帰る。それはまことに、すべての女性たちの胸をふくらます、春を待つ日の美しい行事なのである。

◇雛まつりの由来

しかし、雛まつりが今日のような形になったのは、さのみ古いことではない。むろん三月三日（上巳）の節供そのものは、遙か平安朝の頃中国から渡来した歳事の習俗なのだが、その日、身の穢れを祓うために用いた形代が、やがて美しい人形となり、祀られるようになるのは

わが国独自の風習である。そして、いわゆる雛人形が現われるのは室町時代以降のこと、またそれが庶民の間にも普及して雛段が設けられ人形や雛道具がその数を増すのは、江戸時代も中期以降のことであった。その縁起も、原初の祓いの意識から、次第に娘たちの、のちには誕生した女児のための幸福への祈りへと変化して、今日見られるような人形美にみちた一つの世界を現出するまでになったのである。そこには、渡来文化が長い時間をかけてきわめて日本的に変化してゆくひとつの例も見られようし、また、この雛まつりを核として日本の人形文化が花ひらいたということも言えよう。かくして雛まつりは実に色濃く、日本人の民族、風俗、またその人形観の形成にその影を落としているのである。

◇一枚の写真から

むずかしいお話はさておき、お茶の水の附属幼稚園のお雛さまのことをお話ししたいと思う。とはいえ、私は決してこの目でそれを拝見したわけではない。それはも

▲お茶の水女子大学附属幼稚園の雛飾り、全景

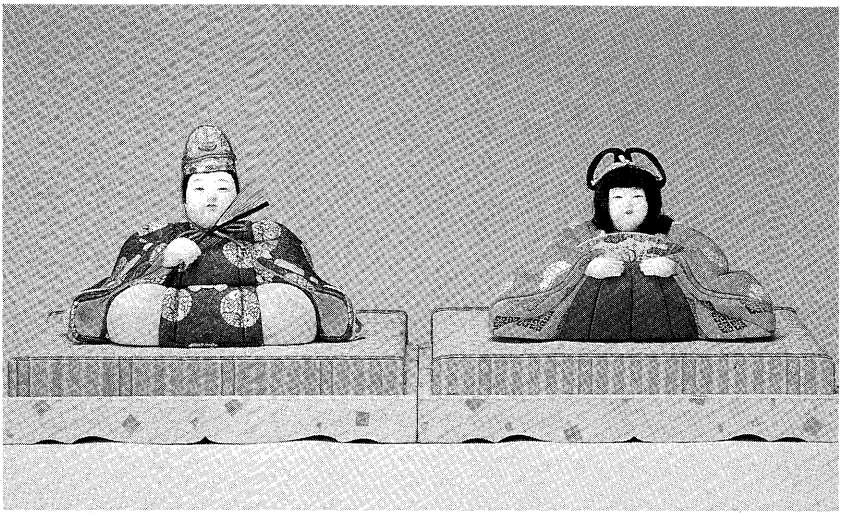
うかれこれ十年ほども前のこと、幼稚園から何かご注文を頂いた私どもの社の者が納品の際写してきた写真から始まったのであった。しかし、まるでお見合い写真に魅せられたかのように、私の目はその数枚のスナップに釘付けになった。そこには、人形を学ぶ者にとって実に多くの貴重な情報が溢れていたからである。

雛段に居並ぶ愛くるしい子ども顔の十五体の稚児雛は、まぎれもなく後年近代御所人形の作家として大成された野口光彦氏少壮の頃の作品であった。そして何と、最上段の内裏雛一対は、私どもの社に大切に保存されているものと寸分違わぬ品なのだった。園から伺ったところでは、羊羹の老舗藤むらのご子息の卒園記念にと同家から贈られた寄付金をもとに、昭和十三年に私の亡父・吉徳十代目山田徳兵衛が調製した品とのこと。それでは、私どもに残る雛はその折の試作品でもあったのかと、はたと心付いたのだった。

そしてそれと共に浮かび上るのは、亡父が当時お親しくさせて頂いていた東京女高師教授・倉橋惣三先生のことである。保育の立場から人形による情操教育を重視されていた先生に、父は大変可愛がって頂いた。そのことは、当時上梓した父の著作に先生がご懇篤な序文をお寄せ下さったことや、父たちが組織した創作人形作家の登龍門「童宝美術院展」の審査員を先生が快諾して下さったことなどからも十分推測されよう（先生がその温顔をさらに綻ばせて、毎日実に楽しそうに審査に立ち合って下さったことを、父は先生の思い出話として昭和四十一年の『幼児の教育』に寄稿している）。幼稚園のお雛さまも、きっとそんなご縁でお納めしたものであろう。

（なお、私ごとだが、私も一度だけ先生の温容に接した遠い記憶がある。それは昭和十二年、小学生の私は父に伴われて、当時中野にお住まいだった先生をお訪ねした。狭い階段を上った二階のお書斎にご本が沢山あったこと、また椅子に掛けられた先生が、本当ににこにことしたつややかなお顔で迎えて下さったことなどが思い出される）

野口氏のこの稚児雛は、私どもの所蔵品をもとに昭和



▲野口光彦作「稚子雛」（吉徳これくしょん）、附属幼稚園の内裏雛と同型

六十年、郵政省が「江戸きめこみ人形」の記念切手の図案に採用した。こうした例も大変稀なこと、「ウチのお雛さまは切手になったのよ」と、お茶の水の園児たちは大いに胸を張ってよいであろう。

◇野口氏のこと

お雛さまの作者・野口光彦氏（一八九六―一九七七）にもぜひ触れておきたい。

日本人形は通常、頭師（かしらし）と着付師との分業で製作されるが、野口氏は祖父の代からの頭師の家に生まれた江戸っ子である。幼くして父を失い、祖父に師事して仕事の基礎をみっちり仕込まれた氏は、昭和初年すでに頭師として頭角を現された。しかし職人としての地位に甘んじることを嫌われ、当時心ある人形師たちが結成した人形芸術運動の旗手として創作人形への途を歩み始められた。昭和十一年、この運動が実って人形は初めて帝展（現在の日展）に一つの位置を占めたが、この時、狭き門をくぐって入選した六名のなかに、氏の名前があった。入選

作は「村童」。古典的な御所人形の手法に近代的な造型美を加味した氏の創作は高く評価された。なおこの時の入選者の中には後年の人間国宝三名も名を連ねているのだが、野口氏の場合は、戦後、氏のもとを人間国宝認定の件で訪れた文部省のお役人と口論し、みずからそれを辞退されたという経緯もあって、終生無冠の帝王を貫かれた。純白な胡粉の輝きと凛とした気品を生命とする御所人形の作者らしいエピソードといえるのかもしれない。

お茶の水のお雛さまをあえて子ども顔に作り上げたというのも、意欲と自信に裏打ちされた若き日の野口氏なればこそであろう。かといって、そこには生硬な芸術家の気負いなど微塵も見られない。十五人の雛たちの何と童心にみちた清らかな表情であることか。野口氏の遺作集にそのひとつひとつのアップが載ったのを見て、私は舌を捲いたのだった。お茶の水のお雛さまを、いわばお見合い写真で見染めた私の眼に、やっぱり狂いはなかった——これは私がいまも内心、ちょっぴり誇らしく思っていることである。

◇「青い目の人形」のことなど

◀青い目の人形となかよし人形

スナップ写真のもたらした発見は、そればかりではなかった。

最下段の向かって左側に座る二体のベビードールにも、私の目は吸い寄せられた。もしかして、これは昭和のはじめに友情の人形使節としてアメリカからやってきたあの「青い目の人形」の仲間ではなかろうか!? なかでも向かって右の小型の人形は、その時の人形に最も多かったアメリカンコンポジションドールであった。

「青い目の人形」は昭和二年、日米摩擦を心配するアメリカの知日家、シドニー・ギューリック博士の提唱で全米から集められた一万千余体の人形が、はるばる海を越えて日本各地の小学校や幼稚園にとどけられたというものである。これに対し日本からは大型の少女人形五十八体を全米各州に贈り、これも当時大きな話題を呼んだのだったが、不幸な戦争のさなか、青い目の人形たちの大半は敵視され、壊されたり焼かれたりしてしまった。現在全国に僅か二百六十六体（平成六年二月現在「横浜人形の家」調べ）の存在が確認されているだけであるが、このスナップからの発見がきっかけで、お茶の水の青い目の人形・メアリーちゃんも専門家に確認されてその数に加わったのであった。なお昭和二年三月、「青い目の人形」の歓迎式典が日本青年館で催された際には、附属小学校の児童とともに園児たちも列席したことが、元教諭菊池ふじのさんの談として、人形交流研究家の武田英子氏の著書に記載されている（同氏編『写真資料集・青い目の人形』昭和六十年山口書店刊）。

さいわい、写真で拝見する限り、メアリーちゃんは六十八年の歳月を経つつも元気でいるようである。色艶もよく、目立った痛みもないのは、よほど大切にされているのだろう。折しも平成七年は戦後五十年の節目にあたる。メアリーちゃんを囲んで、幼い園児たちに平和の大切さをやさしく説ききかせるのも、また意義深いことではあるまいか。

さて、メアリーちゃんたちと共に並ぶおかっぱさんの日本人形は、昔の女の子の最良の友・市松(いちまつ)人形（やまと人形とも）であるが、中にお行儀よくお座りして何かを

語りかけるようなしぐさをしているのは、当時私どもで発売した、関節が自由に曲げられる「なかよし人形」であった。しかもその名付け親こそ、これまた他ならぬ倉橋惣三先生ご自身なのである。塩化ビニルなどの丈夫な素材のなかった時代、お人形といえばこうした日本人形を指したわけだが、西洋人形に啓発されてか、この「なかよし人形」はおなかにママー笛を仕込み、手足に特殊な金属を用いて、どんなポーズも出来るように工夫した画期的なものであった。「今までの人形のやうに静かにだっこされてゐるばかりでなく、なかよくいっしょに遊んで呉れる人形……わたしたちはどんなにか長い間待ちかねてゐたことでせう（原文のまま）」、先生の推奨の辞が私どもの旧いカタログに残る。しかし、戦時中の統制で金属が使えなくなり、この人形も僅か数年で全く姿を消してしまった。その意味でも、これらが健在で、今なおお茶の水の雛段に並んでいることはまことに大きな驚きであった。

▲和宮さまのお人形

◇和宮さまのお人形

発見はさらに続く。最上段左端に小さなお人形が佇んでいる。赤い打掛けを着、髪を稚児輪に結った福々しい

おかめさんの御所人形――それは、幕末の公武合体で徳川家に嫁がれた皇女和宮（のちの静寛院宮）さまゆかりのお人形に他ならなかった。

明治天皇はこの若い叔母宮を大変慕われ、宮によく似たお人形をお傍に置いてその面影を偲ばれたと伝えられるが、昭和十四年、宮の婦徳を讃える財団法人静寛院宮奉讃会が、このお人形の復原品を作って希望者に頒布した。それこそが雛段に佇むお人形なのである。亡父が調製に当たったことから、おそらくこれも倉橋先生とのご縁で園に来たものであろう。原型となった明治天皇遺愛の品は、戦前の国定教科書にもその写真が載っていたが、今ではその存在すら確認できない。辛うじて「鏡様人形」と命名されたこの復原品がその面影を伝えるのみである。そして私の知る限り、この復原品すら、お茶の水と私どもの社と、わずか二体が確認されているばかりである。何と貴重な存在であることか――倉橋先生のご配慮はここにも生きていたのである。

以上、写真から読み取れるすべてを語り尽くしたが、思えば、雛段を中に集う子らに幸せを与え、またすくすく育つ彼らの生命力を貫って、毎年大切に祀られていることが、お茶の水の雛たちをかくも輝かせているのではあるまいか――そんな心持ちがするのである。

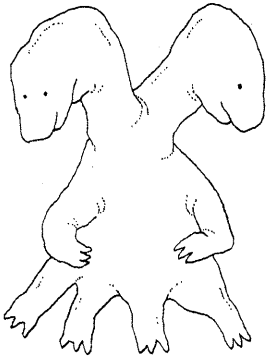
なお、幼稚園にはさらに、女高師教授矢沢弦月氏の筆になる立雛図の軸と、園児の父兄であられた帝展審査員石川確治氏が彫られ、夫人が彩色されたというみごとな木彫雛の一対とがあって、こちらも毎年飾られていると承った。これも亦大変な文化財である。ともに末永く大切にされることをひたすらお祈りしている。

（吉徳資料室長）

ある日

保育の質について考える

津守　真



かかわりの道

Y夫の母親は、いろいろの子どもたちに好かれる。子どもたちの中にいると勉強になるからと、毎日のように保育に参加している。

ある朝、私はこの母親と一緒に保育をしながら、たくさんの子どもがあなたのことを好きなのは、あなたと子どもとのかかわりの質が良いからでしょうと話した。同じように子どもと遊んでいるように見えても、人によってかかわりの質が違う。子どもを抱いている

ときも、いつ降ろそうかと思って抱くときと、その時を子どもと親しくなるチャンスと思って抱くときとでは、かかわりの質はまるで違う。それに加えて、ことばのかけ方、材料の選択など具体的なこともある。Y夫は、母親と話している私の手を持ち上げるように引っ張った。この子はタンバリンや鈴を鳴らしながら行列をしようと言っているのだと思った。その通りで、しばらく歌を歌いながら、太鼓を叩いて行列して歩いた。ひとしきりすると自分で終わり、二階のベランダに出た。滑り台の上にいくが、慎重でなかなか滑らない。私が先に滑ると、スリッパを滑らせ、手で押していた人形の乳母車を滑らせ、その後で自分がそろそろと滑って来た。足にはいていたスリッパ、手に持っていた乳母車はいずれも自分の分身である。Y夫が自分で滑り台を滑ったのはこの日がはじめてである。先日、保育の後のミーティングのときに、私も母親も他の子どもから誘われると、Y夫をおいて立ち去ることが多いことを指摘されていたので、この日、私は、Y夫の傍らを離れないようにしようと心を決めていた。そのことが、この日のY夫がはじめて滑り台を滑るのを力づけたのだろう。

能動性を養う

午後になって、私は、K子に抱っこをせがまれた。午前中もだれかに抱かれていたし、いつもよりも特別に大人に抱かれて過ごすことが多かった。私は疲れを覚えながら階段を上っていると、K子は「すこし、へん」と言う。私ははっと気が付いた。小さな発作の前

兆のようだ。この子は身体内部の変調をこうして表現するようになっていたのだった。こんなことが二度あった。階段を降りながら、「眠くなった」と言って私の肩に頭を伏せた。校長室のソファで横にすると、一瞬眠った。身体内部の異変を察知したとき、大人にそれを訴え、自分でその時を過ごし易くしようとする子ども自身の意識的努力に私はまたもや感心させられた。発作のような身体の中のできごとは、人の意志のコントロールの外のことと考えられており、そうに違いないが、受け身になるより他ないことをも、この子は能動的に統御することを学んでいる。そのような能動性を養うことにこそ、日常の教育の重要さがある。K子は一瞬の後目覚めるとすぐに、夕焼け小焼けの赤トンボの歌を三番まで私に歌わせ、私はその歌詞の最後が分からなくて苦労した。

就学相談

この日、普通の幼稚園に通っているH子が就学相談のために母親につれられて来た。ひと月前に来て、二回目である。私を見るとすぐに手をつないだ。先回来たとき焼き芋を庭で焼いていて、それを食べたのが印象的だったようで、翌日幼稚園から芋掘りに行ったときにもらった三本のうち二本は食べて、一本は私にもって行くと言って取っておいたら腐ってしまったとのことで、またお芋が食べたいという。

庭で、養護学校の子どもの三歳と四歳の妹たちが遊んでいて、H子は一緒に遊びに加わった。三人の間に取り合いが始まり、私は間に入ろうとしたが見ているとその必要はな

く、次第に追いかけっこになり、子どもたちの間で解決してしまった。そこに焼き芋ができてきた。それをまた三人で取り合いながら食べる。私がひとつくださいと言うと、「ダメダモンネー」と三人で声をそろえて顔を見合わせる。こうして長い間やりとりしながら遊んだ。

前回も今回もH子は絵をかいた。前回の絵は、丁寧にクレヨンを前後に動かしながら、きれいな円を描いた。中央が空っぽなので、私はこの子には自分自身の中身がないのだろうかと思い、その絵をとっておいた。今回も時間をかけて丁寧に円を描いたが、その中に、目と鼻と口を描き、円の外に天と地の線を描いた。このひと月の間に、この子は実質的な成長をとげている。

H子は、教育委員会で養護学校または心障学級に行くように指導を受けている。そのことに母親は疑問を持って相談に来たのである。この子は幼稚園でもよく遊んでいるし、こうして見ていると、少人数の子どもとゆっくりと遊べる場を作れば、子どもたちと一緒に学んでゆくことができることが分かる。小学校に入学するときに、どうして他の子どもたちから分離せねばならないのか。幼稚園の先生や母親の疑問は当然である。私は世界のあちこちで見て来たことを思い起こした。旧ソ連下のチェコの幼稚園ですら、子どもによって就学を一年、二年延ばすのは当然と考えていた。日本の行政指導の実情を話してもその意味がむしろ通じないほどであった。子どもの実情をよく見ている人が就学の判断をするのは当たり前ではないか。専門家が最も良く知っているから、判断は専門家に委ねるとい

うのでは、シンガポールのＯＭＥＰセミナーでホッホマン女史が強調していた、現代は専門家の位置がコペルニクス的転回をしたという世界の風潮と逆である。「中心にいるのは、子どもと家族であって、専門家はそれを周縁で支援する人である。」（幼児の教育　一九九四年十一号）。

更に、学校の側を見ても日本の小学校教育では一斉指導しか念頭にない。インドの小学校ですら、算数の授業で、三人、五人と少人数で、子どもたちは、床や廊下で頭を突き合わせて勉強していた。教壇に向かう机の前に座ることを強調するのは、日々の子どもとのかかわりの質を尊重しない考え方ではないか。

私は、いま、ＯＭＥＰ世界大会を目前にして、その準備のために何かをしない日はない。保育の場にあっても、その限られた空間と時間の中のできごとが、世界とどういうふうにかかわるのかを考える。九年前のエルサレムの世界大会のテーマが「保育の質」であった。世界中の保育者が保育の質を良くすることで苦心している。私共の保育の一日の小さな努力は、世界中の保育者に共通の課題である。

（愛育養護学校）

『新しい人よ眼ざめよ』

―大江健三郎　ふたたび―

本田　和子

☆――お父さん！　お父さん！　あなたはどこへ行くのですか？　ああ、そんなにはやく歩かないでください、話しかけてください、お父さん、さもないと僕は迷い子になってしまうでしょう――W．ブレイク「失われた少年」『無垢の歌』より

暗い夜の森で、子どもは露に濡れて泣いている。行方を見失った父親を求めて……。森の闇に露は濃く流れて父の姿を覆いかくし、なきじゃくる子どもの肩を冷たく濡らしている。

「おくれてきた人」である子どもは、置き去りにされる不安に常に脅えつつ、暗い森をさまよい歩く宿命を、避け難く負わされているのだ。「子ども」に近付き、彼らについて何事かを語る行為は、まずはこの痛みの共有の上に成立すべきものに他なるまい。

大江健三郎著『新しい人よ眼ざめよ』と題されたこの作品集、父親と障害を持った子どもとの限りなく美しい共生を描いた物語群は、W・ブレイクの右の詩篇をモチーフとして一篇を冒頭に置いて、作品世界の幕を開けた。

そして、ブレイクの『無垢の歌』と『経験の歌』は、七つの連作を貫流する主旋律である。それは、私どもの心の奥底くに潜む「子どもへの想い」を不断にかきたて、共鳴し合い、それらを増幅させて、宇宙の極みまで無限に鳴り響く聖なる楽の音へと、変貌させようと迫るのだ。作品集の冒頭を飾る一篇は、「無垢の歌」「経験の歌」と題されて、まさしくブレイクの詩集そのものを表題に選び、ブレイクとの抜きさしならぬ深い結び付きを歌い上げていた。十八世紀英国ロマン派の一詩人、子どもの「無垢イメージ」の源流に位置するこの人こそ、いま、共に聖なる楽音を奏し合う、またとなき共演者なのだと……。

――拙稿『幼児の教育』第八十三巻第一号より――

右のような文章から筆を起こして、本誌上に『新しい人よ眼ざめよ』を紹介したのは、一九八四年、作品刊行後の間もない頃であった。発表当初から世評に高かったこの作品群を重々しく取り上げることにためらいがあるとしながらも、あえて拙い短文を弄したのは、子どもおよびそれに象徴されるもろもろのことどもと、共に生きることの栄光と悲惨とが余りにも美しく、かつ重く、歌い上げられていたからである。

そして、私は、前記の引用文の後に、次の一文を続けている。

☆　そして、最終篇「新しい人よ眼ざめよ」は、ブレイクの予言詩『ジェルサレム』の中の、イエスとアルビオンとの確信に満ちた美しい会話から、一節を引くことで結ばれる。

――惧れるな、アルビオンよ、私が死ななければお前は生きることができない。しかし、私が死ねば、私が再生する時は、お前とともにある

重い障害を持った息子との、苦難に満ちた共生の歩みの中から、こうした再生の希望が導き出されたことで、作品世界は、とりあえずは一つの関門を通過した。そして、二十歳を迎えた障害児と、小柄な体でさりげなく、しかもしっかりと兄を支えるその弟に、次代を託しつつ自身の老いへとまなざしを向け

る父親、この三つのまんじの放つきよらかな残光に彩られつつ、作品世界の幕は荘厳に引かれるのである。

――前出――

◇

いま、大江健三郎作品は、世界の檜舞台に上げられ、国際的栄誉というめくるめく脚光を浴びて、賞賛のまなこで見つめられつつある。そして、長らく氏の作品の源泉であり続けたご子息も、作曲家としての順調なデビューを祝福されている。いかにも幸せそうな氏の笑顔と、懸命に見える謙虚さで己を引き締めつつ、しかし、包み切れぬ喜びを口にする氏の声音は、久々に出現した爽やかで快い光景として、私どもの耳目を十分に楽しませてくれた。氏の作品への親近度、あるいは好き嫌いは別として、多くの人々が、この一家に訪れた幸せに拍手を惜しまなかったことだろう。

ところで、氏は、受賞を記念して行われたあるインタビューのなかで、次のような言葉を口にしている。「自分は、光（障害を持った氏の長男）の大きさを、まだ、十分には描き切っていないのではないか」と……。「自分は、鈍な人間であるため、本当のことに気付くのが遅いのではないか」と……。氏が言いたかったのは、障害を持った長男の内部に何が秘められ何が熟成されつつあったかに、気付くのが遅かったしそれを描き出すべく言葉の力にも乏しかったということらしい。

この発言は、確かに感動的であった。そして、このインタビューが公開された時、作曲家大江光の、あの清冽で静謐な、あたかも天から降り注ぐ声にも譬えられる楽音を想起しつつ、氏の言に納得させられた人も多かったことだろう。

しかし、ここで私どもは、一歩立ち止まって、この言葉の意味を問い直すべきではないか。もし、氏が口にした「息子の大きさ」という言葉を、「大江光の作曲家としての成功」を意味すると見るなら、そして、私どもが捕らえられたのが、そうした解釈に裏打ちされての感動だったとすれば、それは誤りではないかと思うからであ

る。氏が口にした「大きさ」という言葉は、単に、彼ら障害を持った人たちが、たまたま、成就し得た仕事の量や質だけを問題にしたものではあるまい。なぜなら、障害を持った人の存在の価値は、彼らがその生涯で発現し得た「見える形の仕事」によって測られるものではないだろう。ましてや、その仕事が成果を上げ得たとか、衆の賞賛を浴び得たということで、価値の上下が云々されるべきでもないと思うからである。

もちろん、大江氏が、息子の才能に瞠目し、父親として大きな感動と喜びを味わったであろうことは想像に難くない。そして、私も、氏を見舞ったこの幸運を、多くの人々とともに喜び拍手することは人後に落ちないのである。ただし、仮に、光氏が作曲の仕事に手を染めず、洗濯挟みを作る福祉事務所の作業だけを楽しんで日々を過ごしていたとしても、果たして、大江氏は「彼の大きさ」を十分に描き切れたのか、否か。文壇や論壇の評価は別として、氏自身は受賞の喜びのなかで、恐らく「描き切っていない」と述懐したのでなかろうか。

私は、前述した作品紹介に際して、拙文の副題を次のように付けた。すなわち「絶望の時代に希望を見る」と……。そして、この短文を次の一文で結んでいる。

☆　父は、ブレイクの詩句を借りて、「眼ざめよ、おお、新時代の若者らよ！」と叫びかけつつ、一つの幻を見ている。新しい時代、しかも、決してバラ色とは言い難い凶々しい核の時代に、凛然と額を上げて立つ息子らの健気な姿を……。このとき、私どももまた、この父のまなざしを借りつつ、暗い絶望の時代に、一条の希望を見ることになるのである。

――前出――

時代の良心と目され、その役割を衒いもなく全身で引き受け続けてきた作家大江は、周知のように、一方の足場を「核」に置き、今一つの足場を「障害を持った息子」に置いていた。そのどちらも、避けて通ることも、また単純に克服することも、困難な問題に相違ないが、それらに真っ正面から取り組み続けることを、彼は、自

身の生のありようとしていたのである。その誠実さに、熱いまなざしを注ぎつつ賛同支援する者たちと、それを暗く重過ぎると避ける立場と、読者の評価は二分されていたが、彼の模索が、絶望と見えるもののなかにこそ希望を見ようとするそれであるとは、大方の認めるところであろう。

そして、氏のこの立場は、仮にノーベル賞受賞というめくるめく栄光に包まれた現在であっても、いささかも変わり得るべくもない筈ではないか。

◇

大江作品において、「障害児」は、単なる作品の素材ではなかった。いささか旧聞に属するものの、川本三郎の評言を次に引こう。「大江は他者として弱者を描いているのではない。自己＝弱者を描いているだけなのだ。誤解を恐れずにいえば大江は、自身、ひとりの大きな幼児なのである。」「大江の作品はどんなに理知的で、どんなに最新の知の意匠を帯びていようが、それらの理性は、幼児のコスモロジカルな感覚、身体感覚によって容易に乗り越えられる。リアリズムのいじましい法則の彼方に、神話的と呼んでいい豊かな空間がひろってくる。」（川本三郎「無垢なるものの『きらめき』と『限界』――大江健三郎論」『同時代を生きる「気分」』）

自らが弱者を引き受ける、というにまして、自らが弱者そのもの、子どもそのものである……。確かに、大江作品において、脳に障害を持つ息子と父との共生が語られる場合、作品世界の父と息子は、あたかも一対の一卵性双生児のようにすら見える。このことは、川本の評言の正当さを、何よりもよく証しするのではないか。

生産性という近代社会の価値基準のなかでは、訳に立たない厄介者に過ぎず、息を殺して生きていくしかない障害児たちの痛みは、大江自身の肉体と魂の痛みに他ならない。彼の作家活動は、息子に勝る言語表現能力を与えられたものとして、その痛みに形を与えるための営みであったろう。

その「言葉持たぬもの」と思われていた息子が、い

ま、「音楽という言葉」を駆使して、父の言葉を越えた美しく清らかな表現世界を紡ぎ出し始めた。ということは、常に自己＝弱者（父＝息子）であり続けた彼の前に、「音によって語る」という新しく引き受けねばならぬ部分が出現してしまったことであり、新事態の出来にいささかならず戸惑いを感じているというのが実情ではないか。「息子の大きさ」とは、「作曲家としての成功」という現実的価値によってではなく、「弱者」と分類されてきたものたちの従来の理解を越える新しい側面の発見において、自身の狭隘さが自覚された結果の発言と解さるべきものと思う。言葉を替えれば、異質の他者として懸命に理解し、弱者として保護と共生を模索してきた障害児のなかから、沸々と湧き起こってきた新しい呼びかけ、その呼びかけに対して、既得の知性や感性に搦め捕られた大人として、即座に対応し兼ねている状態と見ることも可能だろうか。

大江氏の最近のエッセイのなかの次の挿話は、この間の父と子のずれと、そして父の戸惑いとを、ものの見事に語り得ていて絶妙であった。すなわち、息子の将来に関して、音楽家としての夢を問いかけた父に対して、息子は、長い沈黙の末に、「紙は何枚残っていますか」と答えたと言うのである。光氏にとって、五線紙に音符を記す自分の営みは、世間一般で言うところの「作曲を仕事とし、音楽家として生きる」という位置付けとは、いささかも繋がり得ないものであるらしい。当の本人にとって、曲で語るという試みは、苦しみと同時に静かで小さな喜びの源泉ではあるだろう。しかし、俗に言うところの「成功・成就」など言う語とも、あるいは、「将来の生業」などという観念とも、大凡、無縁であると言うことだ。父の問いは、こうした息子の言葉で、避け難く大人としての通俗性を際立たされる。芹沢俊介の言を借りて「息子はこの問いの硬直性を子どもという場所から鮮やかに解体しえている」（「ウォッチ論潮」朝日新聞一九九四、十一、二十九日夕刊）と言うことも可能かも知れない。

障害児とか、弱者とかいう言葉を、川本・芹沢氏らに

倣って「子ども」と置き換えてみよう。私どもが、子どもについて語るとき、しばしば、そして安易に口にするのが、「子どもの素晴らしさ（価値）」とか「未来を担う（可能性）」とか言うそれであろう。そして、子どもに学べとか、子どもの尊さ・大きさに気付けなどと説かれるとき、その「尊さ・大きさ」という言葉は、どのようなニュアンスのものとして流通しているのだろうか。もしかしたら、私どもはその時、「現在は弱小ながら、将来は素晴らしくなるのだから」とでもいう、いつか成就されるであろう生産的価値の幻想に、無自覚ながら搦め捕られているのではないか。とすれば、それは、大江父子の「作曲家的成功」をめぐるやりとりと同様のずれをはらんでいようし、同じ滑稽さを露呈してもいよう。

「子ども」という異質の他者との取り組みにおいて、私どもは、日々、彼らの異化する言動に戸惑い混乱させられる。時には、理解を越えた彼らの表現に絶望することすらあり兼ねない。とりわけ、現代という不透明な時代に、子どもを育てることの困難さには、言葉を絶するものがあろう。しかし、子どもという同化し難い者たちとの共生の過程で、その困難さに絶望しつつ、絶望の中にこそ希望があると気付かされることも多いのではないか。私どもは、瞬時感じられるこの機会に聡くあることが必要だろう。

十年という時間を経て、今、大江作品は、栄光の光りに包まれている。それを改めて見直したとき、私に呼びかけてきたのは、前と変わらぬ「絶望のなかに希望を見る」ことに賭ける大江世界の魅力であった。十年間、携わってきた本誌編集の業務から、私は、今月で離れようとしている。時の話題にからめつつ変わらぬものを押さえ直したこの一文で、任を終えたご挨拶に替えさせて頂きたいと思う。

（お茶の水女子大学）

子育てにおける夫婦の連携(6)

夫婦お互いが幸せに生きるために

飯長　喜一郎

はじめに

「子育てと夫婦の連携」シリーズも、今回で最終回ということである。今回はカウンセリングを専門とする一方、育児と家族関係のいくつかの研究に携わってきた立場から、このテーマについて考えてみたい。

私は研究者、実践家であると同時に二人の娘の父親でもあり、また夫婦の一方の当事者でもある。そういう経験もふまえて考えてみたい。

一、子育てとは何か

何とも妙な小見出しとお思いだろう。いまさら「子育て」を定義づける必要などあるのだろうか。しかし、考えてみるとけっこう考え方にバリエーションがあるものである。

そしてこの問題は育児に関する夫婦の連携を考えるとき、無視できない問題なのである。

ある研究で、育児の夫婦間の分担を調べようとしたとき、途中で変なことに気がついた。それまでは、「次のことをご主人は手伝ってくれますか」という質問で、「おふろにいれる」「授乳する」「おむつをかえる」などをあげていた。この質問の仕方が、ある価値観に染まっていて、しかも不十分であることに気がついたのである。

「手伝ってくれますか」というのは、育児は母親が担うのが当然で、父親はそれを手伝うにすぎないという、研究者側の無意識の価値観を反映していることに気づいたのである。また、その後の項目は行動の大きな広がりを持つ育児を、ごく限られた個別の行為のみで代表させようとした姿勢のあらわれでもあったのである。

「子育てとは何か」と、今一度問いなおしてみれば、それは個別の身近な育児行為にとどまらず、子どもを育てることに付随する諸々の行動すべてが含まれると考える必要が、あるのではないだろうか。つまり、先ほどの例のような道具的な行動以外にも、「ほめる」「しかる」「かわいがる」というような情動的な関係、「子どものための計画をたてる」「調べる」「夫婦で話し合う」などの間接的な行動も「子育て」の重要な側面なのである。むろん、夫婦の一方が他方を精神的に支えるのもそれらのうちに入ると思われる。

二、子育てにおける夫婦の連携のさまざまな様態

子育てにおける夫婦の連携のありようはまことに千差万別である。古典的には、母親がほとんどの育児を担っており、父親は家計をささえるために働くというタイプである。ちょっと考えるとこれは当たり前の形態のようであるが、実はそうでもないのではないか。父親が主たる生計支持者であるというのはサラリーマン家庭と職人の家庭くらいにあてはまるのであり、商家や農家ではそうとは言えない。商家や農家では一家総出で働くのであ

り、そのような家では母親は第一養育者ではあっても、程度の差はあれ、育児はその他の家族も担うものである。祖父母が第一養育者であることもある。

商家や農家は共働き家族の一種でもあるが、その他にももちろん多くの共働きのサラリーマン家庭がある。成人の女性の中では働いている女性の方が今や多数である。共働きと言っても余りにも多様であり、一口でその特徴を言い表すことができない。私がメンバーとして参加した「子どもの発達と父親の役割」研究会では、「週に五日以上、三〇時間以上」働いている母親はフルタイムで働いているものとみなした。それ以下がパートタイムというわけである。

多くの家族においては第一養育者が母親であり、父親がそれに「協力」する。その協力のあり方がさまざまなのである。

〈役割分担〉

育児というものを先ほどのように大きくとらえた場合、その性質によって二種類に分けることができる。一つは子どもに対する具体的な働きかけ（役割）であり、今一つはもっと抽象的な役割である。抽象的な役割とは大きな指針を決めたり計画をたてたり情緒的に支えたりする役割のことである。

そして、具体的な役割は日常的に母親が担い、抽象的な役割は父親が担う、と言われがちである。

しかし、そんなにステレオタイプに考えてしまって良いものではないだろう。人間はさまざまである。細々と気がつき子どもにあれこれ世話を焼く父親がいても良いし、ドンと構えて動じず家の重大な決定には主導権を発揮する母親がいても良いのではないだろうか。また、似た者夫婦で、それぞれ半分ずつ背負っているカップルもあるだろう。

二種類の役割は、要は機能の問題であり、誰かがどちらかの役割を固定的に果たさなければならないというものではない。

ただこのことは重要である。つまり、どのような役割

分担でも良いけれども、自己矛盾を抱えていないことが大切である。「なぜ私が毎日こんなわずらわしい子育てをしなければならないのだろう」と思いながら妻が子どものめんどうを見ていたり、逆に夫が優柔不断な性格であるにも関わらず「活券に関わる」とばかり妻の方針に反対ばかりしていては、不幸である。

三、健康な連携

子育てに関してのみならず、夫婦の健康な連携とはお互いの果たす役割を認め、かつ、自分自身も自らの役割を受け入れていることであると考える。しかし、言うは易く行うは難しである。互いに違う個人史を持っている夫婦が理解し合い、時には自己変革して新しい役割関係を創造しなければならないのである。変化には痛みが伴う。

〈変化の痛みの個人的経験〉

私自身のことが思い出される。

私は、かつても今も共稼ぎである。私自身は共稼ぎの両親のもとで育った。また、いわゆる戦後民主主義を純粋に教育された。そのためかどうか、自分では「男は○○で、女は○○」という考えには立っていなかった。一時はそういう自分が周りの同級生と考えが違うようで悩んだほどである。

忙しくないうちは、自分の建前で生活できた。結婚してからの三年間は大学院生であったので、暇な日には家事を一通り済ませて妻の帰りを待っていた。また、仕事を持ってからすぐに長女が生まれたが、最初のうちは暇が多かったので、我ながらスムーズに行くと感じていた。誰にも言われなくても家事育児を分担してやることができ、建前と本音に矛盾があまりなくてすんだ。家事育児を楽しんでもいた。我ながらうまく行っていると少しばかりの自負心があった。

しかし、悩まずにすんだのはそのころまでだった。

次第に私の仕事が増えてきた。予定がつまりはじめ、思うように分担がうまく行かなくなってきた。些細なこ

とだが、調整に苦労がいるようになってきた。誰が保育園に迎えに行くか、とか、夕飯の準備をどっちがするかとか。

忙しいときに限って子どもが風邪をひいたりもした。どちらが仕事を休むかでもめた。知らず知らずのうちに、自分は休めないと主張するようになっていた。そういう時には、相手の都合を斟酌するゆとりがなかった。「私だって仕事をしているのよ！」と、妻が大きな声を出さないと、相手も仕事上の都合を持っていることに気づかない始末であった。

そういう時には、いつも妙な気持ちになった。いらだち、驚き、恥ずかしさが生じた。自分の思い通りにならないいらだち、相手もそんなに休みにくいのかという驚き、そしてそんな簡単なことに気づかなかった恥ずかしさ。いろんな感情が瞬間的に渦巻いた。喧嘩になったときもあった。しかし多くは話し合って調整することができた。

こう書くと簡単なことのようであるが、実際には、結構、一触即発的な状況だった。そんなことが数限りなくあった。「(その日は) どっちの仕事が大切か」ということを、始終考えさせられた。

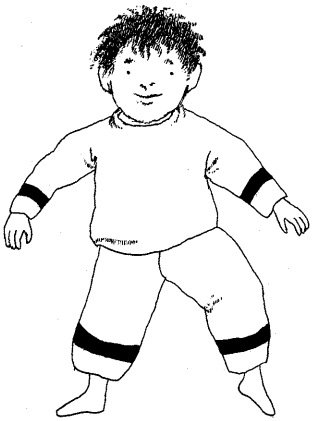
「共働きでなければ、こんな思いをしなくてもすむのになあ」と思うこともしばしばであった。

結局のところ、自分の中の「男女同権意識」は、薄っぺらな意識でしかなかったと気づかされ通しであった。表面の薄い意識ははがれやすく、すぐに本音がでた。自分でも気づいていなかった本音である。仕事で勝負するのは男であり、女は育児の主人公だとする思想がいかに頑固に染みついているか、思い知らされてきた。

今でもその思いとの格闘は続いている。少し大げさに言えば、自分が生きていく限り続くテーマのひとつでないかとさえ思っている。

私がわが家なりの家事育児の分担を妻と作り上げてくるまでには、自分の中の本音と建前の中身や割合を変化させてこなければならなかった。それは私一人で行うにはきつすぎる作業であった。妻が意図すると否とにかか

わらず、妻から突きつけられた課題への答えを探る中で否応なしにしなければならなかった作業であった。そういう意味で、二人でこそ行うことのできる作業であった。



四、子育てと夫婦の連携

育児には間接的な作業の部分もあることはさきに少しふれたが、目に見えるのは何と言っても毎日のこまごました仕事である。だから、かえってそこで本音が出やすい。本音と本音のぶつかりあいになりやすい。このぶつかりあいを、ともかく避けたいと思ったり、一方が他方を言いまかす機会にしたいと思っていては、不幸である。

現代は男性と女性の役割分業観が変化しつつある時代であり、特に男性の価値観の変化が求められている。そのため、夫と妻とが議論する場合には、夫の方に価値観の再検討が求められがちである。

そうは言っても、夫と妻とが運命共同体として一つの家族として生きて行くのであるから、夫のみでこの問題に対処する訳には行かない。二人の共通の問題として考えていく必要がある。妻としては問題の解決を夫のみの責任にして良いとは思われないのである。

男らしさ女らしさという。そして、ややもすると夫だけでなく、妻の方も型どおりの決まりきった男性像を夫に期待しているのではないか。

〈強くない夫〉

子どもの相談からうかがえる夫像は、どちらかと言うと自信のなさそうな姿である。子どもの悩みと言うのはほとんどすべての場合、親の側に何らかの思い直しが要求される。子ども観、自分観、人生観など多くの価値観を再検討しなければならなくなる。カウンセラーは特にそのことを要求するわけではないし、子どもの問題の多数が親の側の大きな問題を伴うとも限らない。しかし、実際には好むと好まざるとに関わらず、子どもについて意外に多くのことを考えるようになる。

子どもの相談にこられる親のほとんどが母親である。その母親を通じて見えてくる父親(夫)には、三つのパターンがあるように思える（夫婦共同で子どもの問題を考えようとするタイプをのぞく）。

① **無関心型**

「子どものことはおまえに任せているのだから、おまえの好きなようにしたら良い」と、妻に任せている。「だから子どものことはおまえの責任だ」と発展することもある。

② **興奮型**

ふだんはあまり子どもの問題にふれようとしないが、時にはカーッとなって子どもに当たったりする。暴力をふるうこともある。

③ **逃避型**

問題に直面しようとしない。問題の存在すら認めようとしない。

このようなパターン化は目新しいものではない。そして私は、かつてはこのような父親に対して批判的な目を持っていたことを否定しない。

父親は（仕事で忙しいという言い訳を考慮にいれたとしても）子どもの問題から目をそむけがちであり、母親

が一人で子育ての問題を背負わなければならないということに憤りを感じることさえあった。

しかし、このごろでは、このことは男が生き方を再検討しなければならない作業の大変さをあらわしているとも思うようになった。そして女性の方は差別されてきた歴史を背負っているだけに、少し早く問題に直面しているのではないか、さらに言えば、女性の方が変革への勇気を持っているのではないかと思うようになったのである。

そう考えると、ただ男性を責めても非生産的である。むしろ、男性をどうしたら問題に向かわせることができるかということを考える必要があるのではないか。

いささか男性びいきの言い方になってしまったようである。しかし、「夫婦の連携」という錦の御旗を押し立てたところで問題は解決しない。生き方の根本に関わるかもしれないテーマを内包しているからこそ、育児について夫婦が語り合い、自分たちカップルのやり方を創造していく、そういう少し苦しい、時としてつらい、しかし、変化の喜びの可能性を秘めた試みに向かって行ってほしいと思うのである。

おわりに

子育てと夫婦の連携という問題を考えるとき、ともすると、理想的な姿を提唱しがちになる。理想はそれとして意義があるかもしれない。しかし、現実には理想通りには行かない。行かないばかりか、何とも情けない「連携」になってしまいがちである。それでも良いではないだろうか。それが現実であれば、そこから出発したら良い。ただ、変わることへの勇気だけは持ちたいものだと思う。そして、相手も変わりたいと思っている、もっと言えば、もっと幸せに生きたいと思っているということを、大切にしたいものである。

（お茶の水女子大学）

*このシリーズは、今回で終了いたします（編集部）

あそびの研究(5)

モンゴルの子どもたちの遊び

藤本　浩之輔

一、モンゴルの社会的状況

モンゴル人民共和国と親しい関係をもっている大阪外国語大学のモンゴル語の先生や留学生たちの援助によって、私は、一九九一年の七月六日から三十日まで、モンゴルの子どもたちの遊び文化の調査をおこなった。

ソ連のペレストロイカの影響によって、モンゴルでも一九八九年十月ペレストロイカが起こり、私の訪問時は、政治的、文化的混乱の中にあった。

政治面では、人民革命党の独裁から多数政党制の政治へと移り、ソ連の影響力の排除、モンゴルの主体性確立が目ざされていた。英雄チンギス・ハーンに対することさらの顕彰は、その象徴的表現であろう。

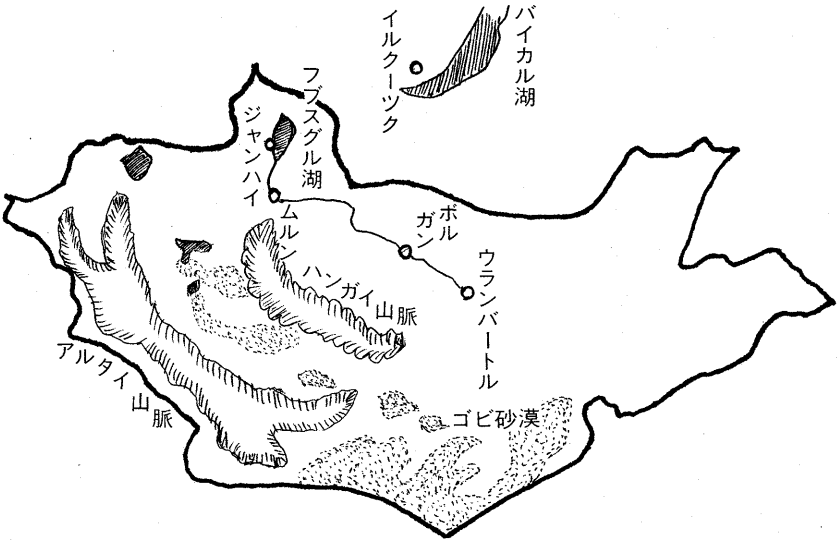
経済的混乱は直接体験することができた。出発準備中の交換レートは一ドル＝十七トゥグルクであったが、行ってみると一ドル＝四〇トゥグルク、九月には一ドル＝一〇〇トゥグルクと変化した。滞在中、一ドルの闇値は一二〇～一三〇トゥグルクという噂であった。銀行もドル不足で、トゥグルクのドルへの交換はできなかった。

重要食品の米、小麦粉、肉、バター、砂糖、茶、酒、

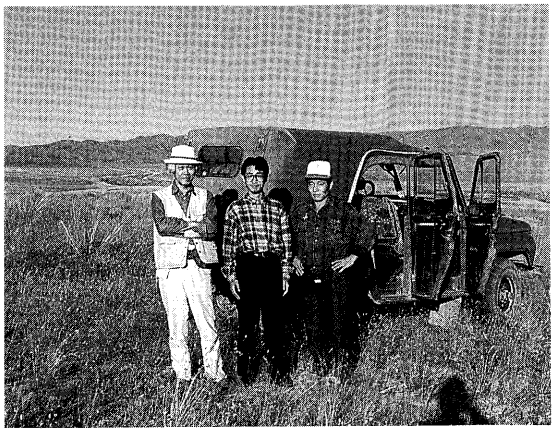
そして石けんや洗剤は配給制であった。したがって、普段の市場にはまったく品物がなく、時々、あちらの市場に野菜が入荷した、こちらの市場に肉が入荷したといって長蛇の行列ができる有様であった。あの牧畜国で、朝、牛乳を買うのに長い列ができるという状態なのである。

革命後、キリール文字が採用されていたが、ペレストロイカ後は伝統的なモンゴル文字の復活が唱導され、あちこちにモンゴル語の看板が立っていた。弾圧・廃止されていたラマ教寺院の再建が始まっており、ハンドマー（女性ラマ）による女性僧院の仮小屋もみられた。

そのような混乱と困窮の中にありながら、首都ウランバートルでも、デモや市民運動がおこるでなく、騒ぎが発生するのでなく、平然と落ちついている。モンゴル通の日本人の説明によると、ウランバートルの住民五〇万人（全人口の四分の一）の多くが農村に根をもっているので、食料品類を手に入れる手段をもっているらしいということ、それに長い権力支配の中でお上にたてつかないという姿勢が身についていることなどが合わさって、



▲モンゴル人民共和国（日本の約4倍の面積）



▲モンゴルの草原にて。向かって左から小生、大阪外大生（通訳）、モンゴル人運転手

そのうち何とかなるさと構えているのだという。

ところで、ウランバートルから出て調査をしようと思えば、車という交通手段が必要である。ソ連製のぼろジープはあるが、ガソリンは配給制のため市販されていない。配給を受けている人から切符を買い集めたり、ウイスキーと交換したりしてなんとか入手した。

調査行程は、図に示したように、ウランバートル↓ボルガン↓ムルン↓ジャンハイ（フブスグル湖畔の保養地）まで七八〇キロ以上に達した。

二、モンゴルの子どもたち

私がモンゴルに入った時は夏休みにはいっており、学校の中の子どもたちをみることはできなかった。しかし、外大の学生T君が、ウランバートルの第二十三番中学校で日本語の講師をしており、その学校の様子をきくことができた。

第二十三番中学校は、小学校課程四年、中学校課程四年、高等学校課程二年の十年制の学校で、市内のインテリ層の子女が入学するハイグレードの学校である。六年生以上の授業が午前八時から十二時まで、五年生以下の授業は午後一時から五時までの二部制になっており、夜は市内の団体の講座などに使用されている。

この学校は、一年生から外国語をとり入れているが、一九八九年まではほとんどロシア語であった。一九九〇

年から、日本語、中国語、英語、ロシア語の四クラスを設置し、それぞれ三五名を入学させた。ロシア語の比重は大きく低下したのである。理科の授業などロシア人教師によっておこなわれていたが、これも打ち切りとなった。したがって、それまで三十名程もいたロシア人教師のうち二十名程は帰国、七、八名はロシア人学校へ移転、二名だけがロシア語講師として残るだけとなった。

▲シャルガモリットの夏期幼稚園

ウランバートル郊外のシャルガモリット（バス運転手組合の夏期保養所）で開かれている第五十四番幼稚園を訪れる機会もあった。本来はウランバートル市内にある宿泊制幼稚園であるが、夏休みなので、この保養地で幼稚園を開設しているというわけである。この幼稚園は、子どもを月曜日ないし火曜日に受け入れ、土曜日の午後二時まで、二十四時間制の保育をおこなっていた。

教育目標は、①自然と親しむ、②身近な社会と親しむ、③文学と親しむ、の三つであるが、保養地では、自然と親しむことと健康を増進することに力点をおいている。例えば、近くの森の中を散歩して、植物や昆虫や小動物を観察したり、草花を見たり、季節の変化と動植物の関わりを考えたりする。そして、乳製品をよく食べ、運動をし、健康の増進をはかるというわけである。

市内では二八〇人を収容しているが、夏休み中はお母

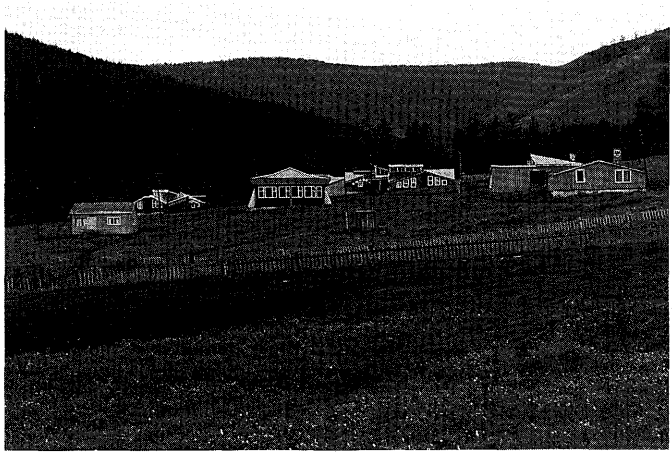
さんの職業組合の保養地に行く子もいるし、田舎に行く子もいるので、ここでの保育は一〇〇名程度だということであった。

シャルガモリットは、なだらかな谷間に広がる草原で、その真中をきれいな小川が自然のままに流れている。ゆるやかな斜面は林である。その自然の中に各家族がセカンドハウス（小屋）を建て、その一角に幼稚園もある。緑の草原で、人々は牛や羊と共にのんびりと寝そべり、太陽の光を楽しんでいるという風であった。

ボルガンでは「子どもの保養所」を訪問した。従来、ピオネールの夏営地という名称であったが、一九九〇年から名称変更がおこなわれたそうである。

ここも、美しい谷間の林と草原の中に施設がつくられており、その真中の低い所を清流が流れていた。収容人数は二八〇名。一回の受け入れは十四日間で、夏休み中六回の交代がおこなわれる。一、二回は五年生以下の子どもたち、三回～六回は六年生以上の子どもたちで、私たちが訪問した日は三回目の最後の日だったようだ。ホールでは別れのダンスがおこなわれており、中に十名程のロシアの子どもたちが混じっていた。ボルガンはロシアに近い所にあり、毎年、イルクーツク市と十名程度の交換交流をしているということであった。

▼ボルガンの「子どもの保養所」



スポーツ委員会の説明によると、この保養所の教育目標は、①自然の中でゆっくり休養すること、②乳製品をたくさんとり、健康の増進をはかること、③各地から集まってくる子どもたちと交流し、体験を交換し、社会性を養うことで、指導には学校の先生や学生たちが当たっていた。

▲牧民の男の子――遊牧の手伝い
家畜の水のみ場にヒツジとヤギの群れを連れてきたところ

費用は、国からの補助があるので非常に安く、十四日間の個人負担は五四トゥグルク（日本円で一八九円）である。

ジープで旅行していると、所々で牧民のゲル（中国でいうパオ）をみることがある。学校がある間は寮にはいっていた子どもたちも、夏休みなので、父母のゲルに帰って生活をしていた。牧民の子どもたちはよく働く。男の子は、牛や羊の放牧やその他の家畜の世話が中心であり、女の子は母親の仕事を手伝って、食事つくり、乳しぼり、乳製品づくり、毛皮製品づくりなどをする。幼児が、バケツをもって、燃料にする家畜の糞集めをしている姿もみることがあった。

三、子どもの遊び

モンゴルでも、日本の子どもたちの遊び文化三十二種類の調査をした。モンゴルのどこに行ってもあった遊び

は、お手玉（シャガイ）石けり、あやとり、おはじき（シャガイ）、ままごと、人形ごっこ、手合わせ、ごむとび、かごめ（類似のサークルゲーム）、花いちもんめ（類似のラインゲーム）、ごむ風船（かつては牛のぼうこうを使うこともあった）、じゃんけん（グー、チョキ、パーはない）、おにごっこ、かくれんぼ、ぶらんこ、すもう、輪まわし、けん玉（ロシア風のもの）、つなひき、くぎたて、ぱちんこなど二十一種類。

どこに行っても無かった遊びは、ヨーヨー、びー玉、馬とび、鹿あそび（胴馬）など四種類であった。

次に、モンゴルの子どもたちの特徴的な遊びをいくつか紹介しよう。

シャガイ・シューレヘ（お手玉）

シャガイとは羊の後足のかかと部分にある小石状の骨（距骨）のことで、モンゴルにはこのシャガイを使うゲームは数多くある。まず、シャガイ・シューレヘというゲームだが、これは多数のシャガイを床にまき、鎖の小片（昔の鎖よろいの一きれを使うとも言う）を上にあげ、下のシャガイをいくつかつかんで、落ちてくる鎖を受ける。鎖が受けられなければ、もちろん失敗であるが、つかまないシャガイにふれるというのも失敗とみなされる。くり返しおこなって、多数のシャガイをとった者が勝ちとなる。

直訳すると「シャガイつかみ」であるが、これは日本の石なご（石お手玉）と同系列の遊びで、骨のお手玉である。モンゴルではいつ頃からおこなわれ始めたか不明であるが、アナトリア地方（トルコ）では、紀元前一千年頃すでにおこなわれていたという記録（レリーフ）がある。日本で、石なごの名称が文献に出てくるのは平安時代になってからであるから、それより千二百年程も後のことである。

シャガイ・ニャスラッハ（おはじき）

シャガイは、床にまくと四面が出る可能性があり、それぞれの面の形状によって、ヤギ、ヒツジ、ラクダ、ウマの名称が与えられている。多数のシャガイを床にまいて、同じ面が出ているものだけを日本のおはじきの要領

ではじいてとっていく。はじかれたシャガイをとる時、他のものにふれてはならない。最後に残った四つをまいて四つの動物が出た場合、早く見つけたものが全部をとることができる。

モリ・オラルダッハ（馬の競争）

シャガイのウマの面を一列に並べる。出発点に各自のシャガイを置き、五つのシャガイをサイコロの要領で振り、ウマの面が出た数だけ自分のシャガイ（駒）をすすめる。早くゴールに達した者が勝ち。日本の回り将棋に類似のゲームである。

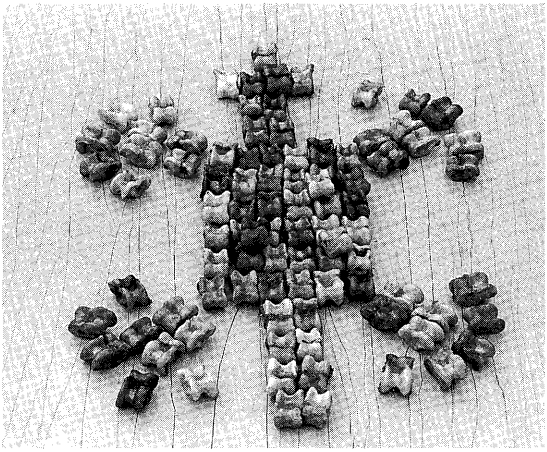
アラッグ・メルヒー（まだらの蛙）

下の写真のように、シャガイを並べて蛙の形をつくる。サイコロを振って、その目の数だけとっていく。多数とった者が勝ちとなる。蛙の形をこしらえたり、数をかぞえたりするので、大人たちが幼児と好んでする遊びである。

ナイザー・オロフ（友だち見つけ）

調査によって、伝承遊びが意外に国際的であることを

▼アラッグ・メルヒー、シャガイを並べて蛙の形をつくる
（尻尾がある――日常みることがないので尻尾があるのか無いのかよくわかっていないらしい）



知っていたが、それでもなおかつ「かごめ」や「花いちもんめ」は日本独自の遊びであろうと思っていた。ところが、これらにも類似の遊びがあった。

ナイザー・オロフは、二人が輪の中に入り、背中合わせにくっついて両腕を組む。周囲の子どもたちは唄を歌いながらぐるぐると回る。唄の最後に、輪の中の二人は自分の思う方向に顔を向ける。二人の顔の方向が一致すると、友だちが見つかったというわけで、二人のうち先の子どもは外に出、新しく指名された子が中に入って同様な所作をする。

この遊びにはもう一つのパターンがある。一人が輪の中に入り、立ったまま目を閉じ、手を水平にあげて指を差す。周囲の者は次のような唄を歌いながら時計回りにまわる。

アーラー　ジム　ジム
アーラー　イラ　ブスィダ
バカ　ジカ　ノービヤ
イーラス(一)、イッドゥウ(二)、イットゥリ(三)

それと同時に、中の子は反対回りにまわる。唄が終わった時、指を差された子どもが交代して中に入り、同様の所作がおこなわれる。

▼ナイザー・オロフをする子どもたち
ウランバートルの国地にて

アルタン・ギンジ・タスラフ（くさり切り）

この遊びは、日本の「花いちもんめ」に相当する。花いちもんめと同様二つの組にわかれ、向かい合って手をつなぐ。お互いに唄を歌って行きつもどりつする。

A　金のくさりを切ってみろ

B　誰が切る

A　○○さん

指名された子は、相手の組に向かって勢いよく走っていき、つないでいる手（くさり）を切る。切れるとどちらかの一人を連れて帰ることができるが、切れなかったらその子が相手の組にとられる。

この「くさり切り」は、中国奥地のウイグル自治区でもおこなわれていたところをみると、かなり広く分布している遊びのようである。

ボッダク・ゴイフ（えのぐ乞い）

モンゴルのおにごっこにおけるオニは、オオカミである。そして、開始の時にちょっとした問答がおこなわれるというのも特徴的である。遊びの始めに、子どもたちは自分の色をきめる。外からやってきたオオカミが次のように問いかける。

オ　えのぐをくれ

皆　何色ですか

オ　赤色だ（青色でもよい）

赤色ときめている子が出て、オオカミの掌を打ちながら数をかぞえる。一〇、二〇、三〇……一〇〇。九〇まで数えた時、皆は逃げ、オオカミは一〇〇をきいてから追いかける。

チョノ・タルバガ（オオカミとタルバガン）

モンゴル草原を旅していると、ウサギのような動物が巣穴のへりに二本足で立って、好奇の目でみているのによく出会う。これは、タルバガンというマーモットの一種で、地中に穴を掘って住んでいる。オオカミのよい餌じきにされる動物である。オニであるオオカミとタルバガンの間で問答がおこなわれ、おにごっこが開始される。

タ　オオカミさん、オオカミさん、火をください
オ　火を使って何をするんだ
タ　のりを煮るんだ
オ　のりでどうするんだ
タ　弓矢をつくるんだ
オ　弓矢でどうするんだ
タ　お前の頭を射ぬくんだ

こう言ったとたん、タルバガンは逃げ、オオカミが追いかける。

遊びにおけるタブー

モンゴルの遊びの中には、伝統的にタブーとされてきたものがいくつかあり、それらの遊びは最近になるまであまりおこなわれなかった。

ザブハン県やゴビ県の例でいうと、かつては人形ごっこはタブーであった。その理由は、子どもは未来を予知する能力があり、子どもが希望したことは近く実現すると考えられていたから、子どもが人形ごっこをして人形を欲しがると、子どもが生まれるというわけである。だから、ままごとが延長して人形ごっこになったりするのを、老人たちに見つけられるとよく叱られたものだという。

同様の理由で、お医者さんごっこで病人になると病気になり、戦争ごっこをして死ぬまねなどすると本当に死ぬことになる。したがって、こういった遊びもタブーであった。

昔は、かくれんぼをすると家畜が死ぬと言われていたので、農村ではかくれんぼはタブーであった。都市では家畜を飼わないので、最近はかくれんぼもおこなわれるようになっている。

また、馬とびや鹿遊び（胴馬）のように、前かがみになった人の背に乗る遊びもタブーである。頭は大事なところであるから尊重すべきで、とび越したりしてはいけないとされているのである。したがって、他人の帽子をかぶったりすることもよくないとみなされている。

（京都大学教育学部）

＊このシリーズは、今回で終了いたします（編集部）

ある日の育児日記から

(51)

佐藤　和代

四月、といえば新学期。我が家も大きく変化しそうです。敬が（主人です。主人というのも夫というのも変なのでこう記します）会社を辞めたのです。次の仕事はまだ考えていないので、当分主夫するぞ！　なんて言っているところ。

さて、主夫業の手始めは保育園の送り迎え。慣れないので忘れ物ばかりしていますが、子どもには「お父さんだと、自転車ビューンって速いんだよ！」と好評です。もっとも有は時々「お父さん会社で、お母さん保育園なのー」とごねていますが。二歳には二歳なりの社会常識があるのかな。

でも、妻子があるのにどうする気だ、などと周囲がやかましい中で、保育園では先生方も親も平静。送り迎えするお父さんは多いので、敬も目立ちません。そういえば、保育園の子の父親って、画家やらミュージシャンやら劇団員やら、かなりバラエティ豊かです。こっちの社会常識は柔軟なよう。「敬が失業してるの！」と言ったら、あるお母さんは「じゃ『稼がないダンナを持った妻連盟』ってのつくろう」なんて笑っていました。保育園でできる知り合いって、結構ユニークでいいな、と見直したりしてね。

ともあれ、主夫が誕生した我が家がどう変化するか、これからをお楽しみに。

昔なつかし(?)キツネのマフラー。お気にいりなの。

私の子ども時代(6)

大陸で育った私

今井百里江子（もりえこ）

私は、一九一六年（大正五年）六月七日生まれ、今年満七十八歳です。「私の子ども時代」という題で話し始めますが、私の記憶にある、年齢や出来事が、数え年と満年齢のように現在と、多少、食い違いがあるかもしれない事を、最初にお断わりしておきます。

私の両親は、明治四十一年、父が四十歳の時、二十歳の母と結婚（初婚同志）しました。すぐに父は、外務省から派遣されて、中国海関（フェイフン）封弁の任に就き、母を伴って渡中しました。日清日露戦争の後で、要所に日本人が配属されていました。父も、旅順、北京、上海、安東（現・丹東）、福州、大連、営口（牛荘）と、港々を転勤しました。結婚以前の父の事はよくわからないのですが、高等予備門で夏目漱石と同級生だったようです。その後漱石は東京帝国大学文学部に、父は工学部に進みました。ともにイギリスへ留学しまし

たが、漱石は、病を得て帰国したのに、父はケンブリッジからマンチェスターの工場へと勉学の場を移しイギリスの生活を楽しんだのでしょう。英語が達者なので、中国海関に派遣されたようです。父母は、夫婦二人の生活を大切にしたらしく、三男三女に恵まれた後も、父が母を大切にすると評判だったそうです。私が、営口の日本人小学校一年の大正十二年九月二十九日（関東大震災の月の終わりです）に、父は、朝、頭が痛いと言って仕事を休み、そのまま、脳溢血で亡くなりました。学校の先生から、「早く帰りなさい」と言われ、理由もわからないまま帰宅したら、家の前に花輪がたくさん並んでいたのを覚えています。

母は、明治二十一年五月五日生まれで、高等小学校を卒業した後、私立の女学校に入学。そこで後の十文字学園創設者、十文字こと先生に教わっており、教師として素晴らしく、お教えの内容も立派だったので、後に、私が「東京女子高等師範学校を受験したい」と言った時は、「十文字先生が出られた、あの学校なら」と承諾してくれました。母は二十歳で、二十歳も年上の男性と結婚して、よく、中国へ渡ったものだと思います。父が亡くなった時は、一番下の弟を妊娠していて、東京へ帰ってから産んでいます。長女・万里子（まりこ）は大正二年上海（シャンハイ）生まれ、次女・千里子（ちさとこ）は大正四年安東（アントン）生まれ。私、百里江子（もりえこ）は大正五年福州生まれ、長男・春雄は大正八年、次男・義雄は大正十年、三男・実（ジン）は大正十三年、弟達は東京（現・台東区谷中三丁目）で生まれました。私が七歳の頃、営口で猩紅熱が流行し、次女千里子が亡くなりました。家の囲りが消毒薬で白くなり、「ちー坊はのの様になったよ」と、父が白木の箱を抱いて帰ってきたのを覚えています。春雄は、昭和四十三年冬山で遭難死、義雄は北支で昭和十九年戦病死しました。

両親の実家は、両家共、徳川家直参の旗本でし

たから、明治維新後の士族には、価値観も、生活そのものも大変な変わり様だったでしょう。母方の祖父や、曾祖父の話には、勝海舟や榎本武揚等の名がよく出てきましたし、曾祖父は、御維新前に幕府の遣欧使としてフランスのナポレオンⅢ世に謁見のため派遣された一行の中の一人でした。彼は、エジプトのスフィンクスの前で初めて写真を撮られた日本武士の一人です。その写真なども、戦災で焼けてしまいましたけれどね。でも、彼がヨーロッパへ行っている間に、幕府の方針が変わり、日本へ帰ってくると、閉門蟄居を仰せつけられてしまいました。扶持を離れてしまった訳です。でも、大政奉還後、英語、オランダ語ができ、ヨーロッパを知っているというので、大審院に籍を得たのです。この様に、母の里方は、良いも悪いも開化に関係しており、母も、開化や士族の心の持ち方、時世に添う生き方の大変さを、子ども心に感じて育ったと思います。母の叔母は、本郷教会の牧師と結婚して、カリフォルニア大学に留学のためロサンゼルスに渡っています。短歌をよくする人で、夫と共にグローサリーストアーを営みながら、在住日本人の新聞（羅府新報）に短歌指導や、随筆を書き、狩野派の絵もよくする人でした。

こうしてみると、私の父は留学したし、母も、外国で暮らす親族を間近に感じて育っています。子どもというのは、父親母親のルーツを、身分や教育ではなく、人間としての感性のルーツを迄引き継ぐのではないかしらと思えてくるのです。

私は、子ども時代を外地ですごし、日本を内地と呼んで育ちました。回りにはその時々に、モンゴル、イギリス、ロシア、オランダ、中国と、いろいろな国の人達がいました。長じて中国との戦争になった時も、私は中国の人を憎いと思った事はありません。だって、身近にいたアマやボーイ

達は、生い立ちは違っても、とても良い人達でしたもの。戦争で心底、口惜しいと思ったのは、弟の戦病死について調べた時です。北支の病院で、何十人かの兵隊が、同じ日付で、同じ病名で死んでいるのです。そんな事がある訳がない。事実ではないと思った時、その部隊が南方洋上で全滅、生還者九名との事を知りました。可哀相に、何と無残な、と思いました。女高師の学生時代、南京陥落等々の度に、旗行列、提灯行列に参加させられましたが、意識は別に在りました。今の若い人達は、どんどん海外へ出て、買物をするだけでなく、そこに住み、人を愛するといいですよ。現地で、日本人がちゃんとしていれば、現地の人とちゃんとしたおつきあいができる、その事が大きな意味を持つと思いますよ。

話がそれましたが、当時、両親は、中国人をアマやボーイとして、英語で使っていたし、他国の人と話すのも英語でした。中国語は地方により異なっていて、北京語では通じないためでした。母は仏教徒でしたが、日本から仏教関係者が来ていなかったので、教会で宣教師や邦人の奥様方とおつき合いし、日曜日には子ども達は日曜学校へ行きました。賛美歌や童謡を白人の子ども達と英語で歌っていました。満州では、不景気な日本から、多くの日本人が渡って来ていました。彼等と、以前から居る私達はどこか違っていたように思います。日本人小学校の校長先生も、日本からいらしてましたが、休みの日に父が話しに行くのについてお宅に伺った時なども、すごく丁重にもてなされ、子ども心にも、日本人間の格差を感じたものです。営口では、旧市街と日本人学校のある新市街とに分かれており、はじめは旧市街の煉瓦造りの洋館に住んでいました。すぐ近くに遼河(リヤオ)の堤防があり、中国の青い帽子の兵隊が剣付鉄砲を持って立っていて、夕方、ラッパが鳴ると隊へ帰って行きました。遊んでいた子ども達も、ラッ

パが鳴ると家へ帰ったものです。日本人は多くても、満鉄病院以外の日本人の開業医は少なく馬車で往診に来られたり、私達は、日本から連れてきていた車夫に引かれて、人力車で通院したりしました。母と一緒に医院に行った時の事ですが、待っている間に、アマに連れられて村の包(パオ)のようなテントに行った事があります。中では、弁髪の人達が、座って頭を敷物につけて拝んでいました。何教だったのでしょう。怖いような、不思議の国のような、奇妙な体験でした。家の暖房はストーブ、燃料は石炭でした。貯炭場の周りにはコーリャン畑が広がり、遼河の堤防にはすすきが風に揺れて、ずっと彼方でないと山は見えませんでした。大連ではアカシア（ニセアカシア）の並木が続いて、土塀があり、ゴルフ場も近くにあり、私達は父のおともをしてボーイを連れてよく遊びに行きました。又、母が「うちへいらっしゃい」と言うので、友達が家へよく遊びにきました。子ども部屋があり、日本からとり寄せた『子どものくに』（婦人の友社）や人形、母が作ったお手玉などで遊びましたね。おやつはビスケット、キャンディと紅茶で、友達は喜んで食べていましたよ。そんなある日、彼等が帰った後、弟が「ママ、僕のご本がない。持ってっちゃった」と言うのです。それを聞いたボーイが追いかけて行きましたが、母は「あら、そう？　持っていったのではなくて、あなたが貸してあげたのでしょう？　見たい人には見せてあげなさい。大きくなってよそで本を貸していただいたら、お借りしたものはちゃんと返すのですよ」と、そんな風でした。あの頃の我が家は恵まれている方だったと、今になって分かりますが、あの、母のヒューマンな気持ちはどこから来たのかと考えます。母は、召使いを叱ったり、さげすんだりは決してしませんでした。又、子どもがどんなに幼くても人格を認めてくれ、兄弟間でも互いの名を呼ばせ

て、お姉さま、お兄さまとは呼ばせませんでした。夜、夫婦で出かけなければならない事も多く、大人の世界と子どもの世界をきっちりと分けて育てましたね。編み物、洋裁、英会話を牧師の奥様から習っていて、子ども達の洋服は手作りでした。私の七歳位の時の写真は、母の手作りの洋服を着て、ネックレスをしています。日曜学校のクリスマス劇で、天使役をした時の白い衣裳も作ってくれました。翼は本物の白鳥（？）の羽根だったのではないかしら。靴は三歳頃までは繻子地に刺しゅうのあるきれいな極彩色の中国靴をはいて育ちました。母の手廻しのシンガーミシンは、今も我家にあります。今となっては貴重なものとなりましたね。そして、母の色彩や配色は、つまり、母が染めさせた着物の色合いや私達に作ってくれた洋服の色合いは中国風で、赤、青、黄色が入っていて、くすんだ色合いは無く、粋というのとは違っていました。このように、七歳まで日本らしい物とは無縁で育った私は、東京へ帰って来て、皆、和服だし、暖房が無く寒いので、最小限度の和服はあったけれど、とうとう着物になじめず、今でも自分では帯も結べないでいます。食事も洋風でしたから、焼き魚、みそ汁、たくわん、納豆が食べられませんでしたよ。

父が亡くなり、十月になって関東大震災の後初めて大連に入港した日本の貨客船で日本に帰って来ましたが、見る物聞く物全てが不思議でしたね。鉄道は不通になっているので、人力車で家までの途中生々しい焼跡や死体のようなものの他は一望千里、何もありませんでした。帰国後すぐに、当時の下谷区谷中尋常高等小学校一年生に転入学しました。震災の後だったから被災者だと思われたのでしょう。教科書や、肩からかける鞄も頂きましたし、可哀想に思ってか、皆、親切にしてくれました。中でも、隣の席の女の子がよくしてくれたのですが、その子は皆から疎外されてい

るの様なです。後で、韓国の人だと分かりました。そういう時代でした。関東大震災は、大陸では「日本全滅」と報じられていて、やっと貨客船の三等の切符が取れて帰ってきた訳ですが、当時の私は、場所の取り合いをしなければならない三等に乗るのも、父が亡くなったためだとショックでした。母は着飾る人ではありませんでしたが、装飾品や着物なども、大陸からは一部しか持ち帰れず、やっと持ち帰った裾模様の着物等も、父が亡くなり、子ども達のためにつつましく生きようとしたのでしょう、呉服屋さんに売ってしまったようです。ある日、弟が竹の輪のおもちゃがほしいと言った時、私は「うちはパパがいないからわがままを言ってはだめ。これからは、ママの買って下さる物以外をおねだりしちゃだめよ」と、おませな事を言ったものです。

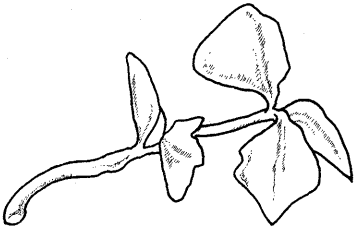
翌大正十三年七月、子ども達が小さいから体のためにと、郊外に家を建て、移りました。地名は、豊多摩郡落合村下落合。足袋もはかず、わら草履で、袴もつけずへこ帯だけの子ども達のいる小学校へ行った時は、ひどいカルチャー・ショックでした。村の学校は落合第一小学校だけでしたが、震災で家を失った人達が郊外へと移住し、児童数が増えて収容しきれず、落合第二小学校がつくられました。私達兄弟はそこに転校しました。小学校を四度かえたわけです。

でも、こうした事は、日常の自分の境遇が急変しただけで、とまどいはあっても性格にまでは深く影響していないように思います。私が今、敗戦後、精神的に立ち直ることができたのは、塚本虎二先生の集会で授かった信仰の故と思います。そこに辿りつくまでの道程に母の愛がありました。母の行動を見て育ったからだと思います。母はクリスチャンではなかったけれど、牧師の妻としてアメリカに渡った叔母や、大陸での牧師夫妻とのおつきあい、そして、母自身が元士族で、格式は

あっても決して豊かではない家で、厳しく物を大切にと育てられた事が大きいでしょう。母は、士は扶持を頂く、農工商はお金を働いて得るけれど、農は自ら作る、だから尊いと教えました。又、物の命という事をよく言いましたね。「勿体ない」が口ぐせでした。ですから母の言う「ボロ」は「正真正銘のボロ」でしたよ。「粗なれども卑ならず、貧なれども賤ならず」という意味の言葉があるでしょう。間違っているかもしれませんが…。「清貧」にも通じる大好きな言葉です。今と比べると当時は本当に質素でしたよ。戦時中は、言語に絶する位物資がなかったけれど、畑から盗むなんて事はできませんでしたよ。金目の物を身につけなくても、趣味良く、人間の品性が自ずから外に滲み出る人になりたいものです。非常に難しいけれど、親が家庭でそれだけの心構えがあると、何分の一かは子どもに伝わると思うの。外には見えなくとも、自分はそうありたいと思うだけでもいいと思います。

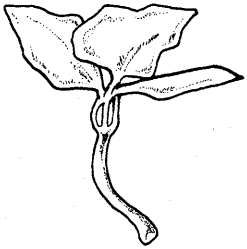
子ども時代というのは、周囲の人の「人としての在り方」に触れて育つ時、それが家庭教育だと思います。親の心の在り方が、その子の人間性のルーツになるのです。知識とか、将来のためなどとは無縁のものでしょうね。（談）

（お茶の水女子大学名誉教授）



〝人〟との関わり

大下　祥子



〝人〟その一人一人が尊厳を持ち、多様に生き、考え、行動する。〈大人、子供〉〈男、女〉〈日本人、外国人〉群を作って他を排除し、差別をする。便利かもしれない。しかし違った一人と出会うこと、そこに、不思議なおもしろい世界を見つけることができる。

主婦の立場からこの十数年の人との関わりを書いてみる。

我子との関わり

「ただ今―」何の愛想もなく玄関を入ってくる息子。中学三年、世間で言う高校受験生である。八月七日の朝東京を自転車で出発してから十七日目。全身真黒、ただ手のひらと握った指の先だけを白くして北海道から帰ってきた。前年九月から毎晩筋肉トレーニングと称して腹筋、腕立て伏せをしていた。三か月、半年と続けている様子に、なかなかやるわいと感心はしていたが、それが北海道自転車旅行の準備とは知らなかった。一学期が終わると早々に世田谷の家を早朝出発。持ち物は着替え、寝袋、地図、郵便局の預金通帳、その他自転車の修理道具とかなりの荷物。マウンテンバイクのあちこちにぶら

下げていく。初日は宇都宮。夕方待ちに待った電話と受話器に飛びつくと、「こちら宇都宮警察ですが……」の言葉に心臓の止まる思い。家出人と間違えられ、その確認の為の電話。受話器の向こうの警察の方に私が励まされたが、当の本人は、最初から〝犯人扱いされ〟憤慨し、夜の宿を色々教えて下さったのにもかかわらず、近くの公園で野宿をしたという。何しろ一人旅、いくらのん気な親、いくらいつも手を焼かせてばかりの息子でも心配〳〵。何の情報も入らぬ一日を唯々夕方の無事の電話を待ち、何も手に付かない毎日。野宿あり、駅の構内あり、ユースホステルありで無事八日目に目的地である北海道八雲町の叔母の家へ到着。八雲町という道路標識が見えた時「僕、鳥肌が立っちゃったんだョ」。途中食事の為に立ち寄った食堂の方に水筒の水を入れて頂いたり、輸送中のトラックのお兄さんにパンをもらったりと、多くの方の親切もたくさん頂きながら自転車のペダルをこぎ通したという。

この息子、我家の次男坊。小学校の時は親も本人も一日一日を過ごすのに大変なエネルギーを必要とした問題児で、小学二年生の時、担任の先生の「大下君は机の上に足を乗せて考えるんですよ」には大汗、躾の悪さに恐縮することしきり。しかし先生は「いいんですよ。彼は今、それが一番安定し物を考えやすい姿勢なのですから、今は目をつぶりましょう。お母さんは気になるでしょうけれど」。又、四年生になると、新任の先生が受け持ちとなり、我息子の為に授業にならない毎日。授業中気に入らなければ暴れてしまう。何が原因か分からないとのこと。何回も先生と話し合いを重ね、とうとう連日、授業参観をすることになる。私が見ているといやがりもせず何とか落ちついて授業を受けている。落ちついたかなと頃合いをみて授業参観をやめてみると、「ええ、今日は静かでした。一人で飛行機を飛ばしていましたから」。又六年生になると、少々クラスの友達をいじめている、自分とは気が合わない友達と校庭の真中で取っ組み合いのけんか。揚句の果て自分のメガネはグチャグチャ。そのメガネの修理代は、お年玉と毎月（五

百円）のおこづかいから二年程かけて返済した。又、ある晩余りに言う事を聞かなかったので「家を出て行きなさい！」。するとリュックサックに何やら詰め込んで出て行こうとする。二歳歳上（六年生の時だったと思う）の長男が、「ゆたか！　寒くなるから上着を持って行けよ」「暗いから懐中電灯持って行け」「お金足りないだろ？」と兄妹の有り金全部を持たせて、さあ出発。そのすぐ後を長男が追いかけて行き、暫くすると二人で戻ってくる。ひと部屋に兄弟三人入り込み何やらゴソゴソ。「お母さん布団、この部屋に運んでもいい？」こちらは怒り返事もしない。三人で苦労して布団を運び静かになる。そーっとのぞきに行くと、

〝こどものキャンプ、おとなは入ってはいけません〟

と襖に張り紙。これで三人は家出をしたつもり、親に精一杯の抵抗を三人で結託して決行したらしい。翌日はケロッと三人起きてきてこの事件も一件落着。この次男、私の生活思考の枠からかなり外れたことをするので親子のけんかが絶えないが、兄弟とは有難いもの、親のできないフォローを上手にしてくれる。ある晩二段ベッドの上に兄、下に弟が寝ていたが、兄から「ネー、ゆたか、〝麻中の蓬助けずとも起こし〟って知ってるか？」弟「知らないよ！」兄「良い友達の中で育つと良い子になるっていうこと、良い親に育つと良い子になるっていうこと」弟「フーン」後から振り返ってみると楽しい子育てではあるが、怒り、悲しみ、頭を下げる毎日、エネルギーを吸い取られ、楽しみ、喜ぶゆとりのない何年かを過ごしたことになる。

その次男、中学校に進学したと同時に普通の子供に変身してしまった。朝は三、四十分前に登校し一人朝自習（担任の先生がそっと教えて下さった）、もちろん無遅刻無欠席。小学二年生の時には、学校へ行かないと頑張り、学校まで十分間程の道を大声で泣き叫ぶ息子を引きずって行ったことがあったっけ。その後も神経性の下痢が続き病院へ。今は部活も一日も休まず、あまり活発な部ではないので部員が一人も来ないことがあるという。そんな時は顧問の先生と親しく色々の話をしてくるとい

う。帰宅すると顔を合わせた兄妹と寝るまで賑やかに遊んでいる。受験勉強中のはずの中学三年、テスト中でも夜九時半には床につく。

テレビ無し、冷房なし、暖房は掘りごたつ一つ、外食はまったくしないし、ファーストフードを利用したことはない。もちろん塾へも通わない。何も無い家の中で有るのは親、兄弟だけ。自分達で探し、発見しなければ遊んでくれる物は無い。末娘が幼稚園年少の春休み、五日間かけて、家族全員で鎌倉稲村ガ崎まで徒歩旅行をした。小鳥の歌を聞き、春の花を探し、土筆を採り、楽しい体験をした。暇な時は本でも読むしかない。

長男は物臭、高校二年生の今まで受験勉強はおろか、普段の勉強、宿題さえやったことがないというつわもの。小学生の間は本だけが友達。近くの図書館が自分の本箱のつもり、朝から寝るまで本を読んでいる。そんな状態だから、朝学校へ送り出すのに一苦労。本を読み始めたら時間なんて関係ない。三年生の時の担任の先生、「学校で教えることなど、たいした事はない。好きなだけ読んで、来たくなったら学校へいらっしゃい」の言葉に親は気持ちが楽になり、それに従い、長男は、遅いながらも自ら家を出るようになった。学童擁護（みどりのおばさん）の方には、「大下君が通過するのを見届けてから学校へ引き揚げるのよ」と言われましたけれど。

自分を徹底的に主張するのが末娘。思ったことを何の遠慮もなくすべて言葉にしてしまうので、ここで又親子げんか。先日は学校の授業中図工の先生に、自分達の自由に画かせてほしいと抗議したという。帰宅し、母親にそのことを報告。最後に、「だって自分の考えを押し付けるのお母さんと同じなんだもん」、これからも苦労が続きます。

お年寄りとの関わり

体力のみが勝負の子育てと並行して、十年間半身不随の姑との生活がお年寄りとの関わりのスタートになる。いろいろな確執を体験しながらも、その大役を終えると、何か大きな財産をいただいた様に思える。最後の二

年間お世話になった特別養護老人ホームへ引き続いておむつをたたみに通う様になる。ホームのお誕生会には、娘のピアノを聞かせてあげたり、私と娘で歌をうたったり、又、娘の小学校のクラス全員で〝風船バレーボール大会〟をしたり、有志でおむつをたたんだりと今でも関わりが続いている。

又、近所の一人暮らしの八十八歳のおばあちゃんのお宅へも通うようになる、始めのうちは、近くの医院への付き添いが主な仕事だったが、齢を重ねるうち、普段の生活も不自由になり、買物、食事の世話とほとんど毎日するようになり、五年間九十三歳まで通う。一人暮らしができるという事は、自分をしっかり持ち、あくまで頑固に生きること。当然、身内、特に嫁との関わりは難しい。私の様な第三者が関わる方が何かとスムースにいくらしい。その方とは、お医者様へお連れする道中、私の背中でお別れすることになる。途中具合が悪くなり背負って医院へ着いた時には事切れていた。常々、一人で死にたく無い、苦しむのはイヤ、寝たきりになりたくない、とおっしゃっていた通りの大往生だった。

現在は、老人ホームの八十三歳のおばあちゃまの所へ通っている。八十三年間の生きた軌跡と知恵と考えをうかがう度に与えて頂き、毎日すばらしいお土産を頂くことができる。体力的には少しずつ弱られる五年間ではあるが、人間として生き尽くすことのすばらしさを感じ、その少しでもお手伝いができればとの思いで通う日々である。

障害児とのかかわり

世田谷区立幼稚園の障害児の教育補助員を始め、二年が過ぎた。区の補助員の職務内容は、「障害のある幼児の介助及び担任教諭補助」となっている。私のクラスには、自閉的傾向の男児、発達遅れの女児の二名がいる。本来ならこの二人にぴったりと付き添い介助をしなければならないのであろうが、私は最小限安全のみを確保するとし、クラス全体、関わりのある幼児全員の中の二人という関わりの中で補助を務める。子供はシビアである。邪魔にする時だってあるけれど、逆に障害のある幼

児のちょっとしたことでも素直に認め感心することもある。自然に〈〈二年間の生活の中でお互いの存在の価値を感じられたら良いと思っている。そうする中で、驚く程の発達をしていくのに目を見張る。自閉的傾向をもつ男児が友達の中へ入り嬉々として追いかけっこをしたり、反対に困っている友達の世話をしたり、発達遅れの女児が毎日ピョンピョンの両足跳びを「先生やって」と手をつないでしている内、上手に自分で跳べる様になり、又それが他の発達にも広がり、大勢でいくつまで跳べるか競争する中心人物になったり。わたしの想像だにしない発展をみせてくれる。

ここでも、又、精一杯生きることのすばらしさを学ばせてもらうこととなる。

我が子もお年寄りも障害のある子供達も、私自身の中で同じ基盤でつながっている。日々の生活はこの他に、小・中・高校のＰＴＡの委員、青少年地区委員、児童館の父母の集まりの世話役、何でも声がかかれば乗っていく。完全でない私が少しでも広く大きくなれる様にと。又、多面に関われば関わる程自分の未熟さ、不完全さに気づき、まだまだ学ぶこと学ばなければならないことを思い知らされる。近所では有名な足で稼ぐ日々に、末娘は言う「お母さん何でもハイハイと良い返事ばかりしないできちんと断ればいいじゃないの、お母さんが引き受けなくても他の人がやってくれるのよ！」。理解してくれていると思うのは私の傲り、家の者はやはり自分達だけの母親でいてほしいのだ。だが待てよ！　私も子供の頃、今の私と同じ様にほとんど家にいない母親を何とうらめしく思っていたことか。だが今、その時の母の行為、思いを理解し誇れる。この原稿もその精神で安直に引き受けてしまったが、これからも誇れる体力を元に、楽しみながら人との関わりの中で財産を作っていくことにしよう。

（元・幼稚園教諭）

妹の誕生と入園準備

河合　聡子

四月になり、それまで公園で一緒に遊んでいた友だちが幼稚園に行き始めたのを見聞きしていた娘、恵理子は、次は自分も幼稚園に行く、と決めていました。

一年前、幼稚園が母親と離れて先生や友だちと遊ぶ所だと知って、恵理子が「ママと一緒にいる」と言ったため、三年保育を見送った時には、行きたくなったら行けばよいと思っていましたが、今年は、友だちに心が向いている恵理子には幼稚園はたくさんの友だちがいて嬉しいに違いないと確信していましたので、迷うこと無く入学願書を提出しました。

入園前にこれだけは、と考えていたことは、元気に「いってきます」と、私から離れて幼稚園へ行けることでした。離れなくては困るというのではなく、新しい世界に晴れやかな気持ちで入っていって欲しいという願いでした。

性格なのか育て方なのか、恵美子は同年齢の子どもの

中でも、ひときわ、母親から離れにくい子どもでした。乳児健診で体重を計る時、私の手が離れると大泣きしましたし、二歳を過ぎた頃、ゴールで母親が迎える形のかけっこでも、恵美子だけが私の手を離さず、一緒に走りました。三歳になった頃は仲良しの友だちの家では私がいなくても遊んでいられましたが、慣れないところでは、私にぴったりくっついていました。公園で遊んでいた同じ学年の友だちが幼稚園に通い始めた同時期に参加した、児童館での幼児クラブでもそうでした。幼児クラブは毎週一回親子で参加します。中心になる先生がひとりと補助の先生が三人、三十組の親子、いつも決まったメンバーで一年間を通しての活動でした。始まった当初は、前に立っている先生にぶつかるくらい前に出て体操している子どもがいる一方で、恵理子は私の横にくっついたまま、つまり子どもの列としては一番後ろにいました。

二歳を過ぎるまで三時間おきに母乳を飲んでいた恵理子は、当然三時間以上私と離れて過ごしたことはありませんでしたし、断乳後も、昼間父親と過ごすことがあっても、夜、私が不在のことはありませんでした。また、私は、二歳七か月違いの弟がうまれたとき、病院へ見舞いに行く父を泣きながら追いかけたり、欲求不満からマットレスに針を差しまくったという話を聞いていましたので、恵理子のストレスを少しでも減らしたいと考えました。診察を受けていた病院は夫の勤める会社の病院でした。看護婦さんの人数も充分で、親切なこと、洗濯もすべてしていただけること、お産に関して自分の希望をかなり叶えてもらえそう等、いいことばかりだったのですが、病室には子どもは入れないきまりになっていました。談話室で面会はできるのですが、新生児には会えません。夜、恵理子が「ママがいない」と泣き疲れて眠ってしまってもしかたがないかもしれないのですが、やはり私には耐えられないことでした。もしどうしようもなくなったら泊まれそうな所、会いたいときはいつでも面会できる所ということで、出産三か月前になって自宅から車で十分程の助産院にお世話になることにしまし

た。

出産一か月前、幼稚園の入園考査と面接がありました（その頃は、恵理子も幼児クラブでも最前列で踊るようになっていました）。子どもが先生と遊んでいる間、親は隣の部屋で待つことになります。親子で面接をするだけだと思っていましたので、恵理子にも何も言っていませんでしたが、子どもの部屋に吸い込まれるように入って行ってしまいました。あっけない別れで、「えりちゃん」と呼びかけてしまったくらいでした。「えりこがね」「えりこがね」という大きな声が隣の部屋から聞こえていました。迎えに行くとまだ遊び足りない表情をしていました。

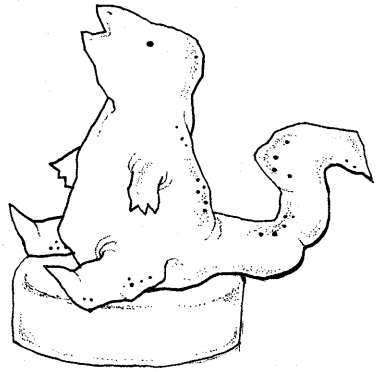
同じ日、助産院を訪ねると、なるべく安静にしているように言われました。予定日よりかなり早く出てきてしまいそうだというのです。児童公園通いや、動物園や水族館、美術館、遊園地など思いつくまま出歩く毎日でしたが、この日から電車やバスに乗っての外出を控えることになりました。出産当日までは恵理子が私と思う存分楽しく過ごせるように思っていた私にとっては、やり残したことがたくさんあるような気がして焦りましたが、どうすることもできませなん。二週間後の幼児クラブでの遠足の付添いも控え、他のお母様に頼むことにしました。しかし、他のお友だちは皆母親と一緒の中でどうなるのかという私の心配をよそに、恵理子は遠足から帰ったその足で、友達の家に行ってしまいました。これなら、幼稚園へ私から元気に離れて行くという気持ちになりました。

十二月迄はおなかにいてもらいましょう、の言葉がわかったのか、第二子、真悠子は十二月二日に生まれました。夜中の出産でしたが恵理子も立会い、最初にいい子いい子と頭をなでていました。出産後も二時間ほど私のそばに居てくれて静かに帰っていきました。五日間の入院中、恵理子は父親と二人で過ごしました。海外出張も断り、恵理子ととことん過ごそうとしていた父親の気持ちが、私の不在を不安なものにしなかったのでしょう。

毎日訪ねてくれましたが、一度も帰りたくないと言ったことはありませんでした。

退院して一か月間は、娘二人と私は、私の実家で暮らしました。私の母が体調が優れないため家のことのほとんどは父がこなし、恵理子と真悠子の入浴も引き受けてくれました。外遊びもさせてくれましたし、図書館や森林公園、小動物園などへも連れて行ってくれました。真悠子が昼間、ずっと眠っていたこともありますが、恵理子は自分のペースで力一杯遊んでいました。私もなにより恵理子が楽しく遊んでいるのが嬉しく、穏やかな日々を過ごせました。

思う存分、休養させてもらった後、自分の家に戻ってからは大変さを感じました。恵理子と私、真悠子と私という二つの別々の関わりではなく、恵理子と真悠子の二人の関わりの中に私が関わっていける形になればいいと考えていましたが、それには、真悠子が小さすぎました。恵理子は外で友だちと遊びたがりますが、鼻がつまり気味で母乳を飲むのも苦しそうな真悠子を寒空の下に出す気にはなれません。それでも我慢ばかりはさせられません。真悠子を部屋に置いたまま、トランシバーになっていて泣き声がわかる機械を持って隣の公園でブランコに乗ったこともありました。ほんの少しの時間でも



気が晴れればと家の周りをひとまわりして雑草を摘んだこともありました。友だちのお母様に一緒に見て頂くこともありました。また、幼児クラブも室内の活動でしたので、すぐに通い始めました。新生児から使用できるベルトでずっとだっこされて真悠子もたいへんだったと思います。

昼間、親子三人で過ごす時は恵理子の心が充分満たされていなかったかもしれません。保護する度合いは真悠子に対する方が大きくなりますから、公平にと思ってもどうしても恵理子に我慢させてしまうことは私にも大きなストレスでした。また、ママを取られたうえに自分は幼稚園に行かされる、という思いを恵理子に少しでも抱かせてしまうことをおそれました。夫が休みの時は、真悠子と留守番してもらい、恵理子と買い物に行ったり、いつもは、見守るだけになっていた公園でも、スコップを持って砂遊びをしたり、恵理子と私の二人で過ごす時間もつくりました。

私が幼稚園の入園のために用意したのは、毎日を丁寧に送っていくということでした。時がくれば親が引き止めても離れていく、早く離そうと無理をすれば、それが不安を生み人への信頼を揺るがすことになると考えていました。早く離れてくれるといいというのではなく、いつも安心して生活してほしい。無理には離れてほしくない。一緒にいたい時に一緒にいられるような毎日を送りたい。その時々を充実して生きていれば幼稚園入園や下の子の出産など、新しい場面で、初めは多少の混乱があったとしても必ず乗り越えられると思っていました。

また、幼稚園に対して楽しいイメージを持ち続けて欲しかったので、恵理子ができないことで「幼稚園に行ってから困るわよ」ということは言わないようにしました。

緊張して私がしっかり手をつないでいた入園式でしたが、保育室ではままごとのおもちゃで遊び始めていました。翌日からは、父親が幼稚園まで送りとどけることになっていました。三月に転居し遠方になり、やっと首が

すわった真悠子をラッシュ時の電車にのせられないという理由からでした。第一日目、ニコニコと起きてきて父親を早く早く、と急がし、意気揚々とでかけていきました。迎えに行くと何とも冴えない表情をしている恵理子。その後「今日は休みにしようかな」ととぼけた様子で言ってみたり、「ママも来て」とせがんだりする朝が続きました。本当に苦痛であるなら休んでもよいと思っていましたが、「行く日にしてもいいのよ」と誘ったり、玄関に出てエレベーターの前で見送ったり、電車の隣の駅まで行ったりしました。一週間も経たない日、それまでとは違いニコニコ顔で帰ってきました。私と手をつなぐと、「恵理子ね、幼稚園に馴れた」と、ひとこと。一週間、恵理子が、心をくだき見守り支えてくださる先生のもとで、心を使い頭を働かせていたことに、その時気がつきました。私がしてあげられたことの何と少ないことか、ということもしみじみ感じました。親としてあれこれ気を配ったつもりでしたが、あたえられただけでなく、恵理子自身がつかんでいったものは大きかったのです。

入園準備というと入園までのこと、と思っていましたが、元気な「行ってきます」を聞くための心遣いは毎日続くということを改めて感じています。

（保育研究グループはるにれ）

編集後記

シリーズで考えてきました〝あそびの研究〟と〝子育てにおける夫婦の連携〟は、今回をもちまして、終わりとさせていただきます。

〝子育て…〟では、毎回、ユニークな子育てモットーや夫婦の姿など、著者ご自身の体験を率直に書いていただき、我身に振り替えてお読みになった方もあったのでは、と思います。家庭の育児力の低下が問題にされるこの頃ですが、家族の基本単位である夫婦の大切さを改めて感じました。

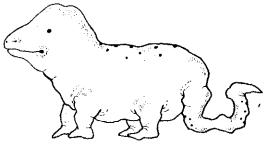
＊

三月はお別れすることが多く、心さみしい時ですが、同時に新しい巣立ちに向かい、希望のふくらむ季節でもあります。

長い間、本誌発行責任者の任をとられていました本田和子先生が、お茶大をお辞めになるのを機に、主幹を交代されることになりました。

四月からは、田代和美先生があとをひきつがれることになりました。田代先生は、保育、発達臨床の若き研究者であると同時に、保育園に通う五歳の女の子のお母様でもあります。編集委員にも新しい方を迎え、一同、新しい気持ちで四月号をスタートさせたいと思っております。

今後とも読者の皆様のより一層のご支援を、よろしくお願い申し上げます。（K）



幼児の教育

第九十四巻 第三号
（一九九五年三月号）
定価四五〇円（本体四三七円）

発行 平成七年三月一日
編集兼発行人 本田和子
発行所 日本幼稚園協会
〒112 東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所 図書印刷株式会社
〒108 東京都港区三田五―一二―一
発売所 株式会社 フレーベル館
〒113 東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六〇四
振替 〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

環境をつくる 楽しい保育室デザイン①

4・5・6月

楽しい保育室から楽しい保育へ。新学期に必要な誕生表や案内標示、くつ箱やロッカーをわかりやすく飾りつけるアイデアを盛り込みました。また、プレゼントやワンポイント的に生きてくるアイデア飾りも各月別に、かわいいモチーフで作りました。オールカラー・型紙付。

環境をつくる 楽しい保育室デザイン②

7・8・9・10・11月

暑い季節は、涼感を呼ぶ室内飾りが何より。季節感を大切にした室内飾りのアイデアをワンポイント飾り、壁面飾り、コーナー飾り、おすすめアイデア飾りにしぼって、提案します。赤ちゃん向きと、幼児向きのバリエーションなど細かい配慮もしています。オールカラー・型紙付。

環境をつくる 楽しい保育室デザイン③

12・1・2・3月

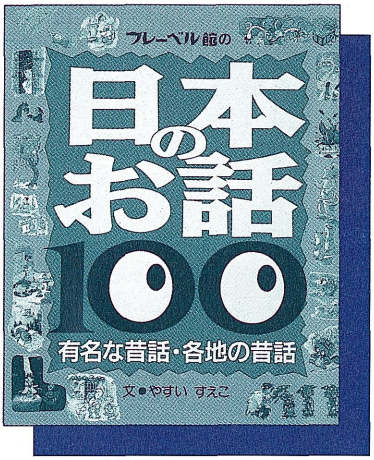
12月はクリスマス会などのパーティーグッズのアイデア、3月は卒園を祝う飾りや、プレゼントのアイデアを加えました。各月のどのアイデアも、子どもといっしょに作ったり飾ったりできる簡単な作品です。楽しみながら作り、飾って楽しむアイデアの提案です。オールカラー・型紙付。

阿部　恵・編著　AB判・各80頁・オールカラー・型紙2色

定価各 2,300円（本体 2,233円）セット定価 6,900円（本体 6,699円）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館



日本のお話100

- 子どもたちに読み聞かせてあげたい100のお話(日本版)。「さるかに」「かちかち山」「うらしま太郎」「こぶとりじいさん」「したきりすずめ」他。
- 一話一話を読みやすい長さにまとめ、美しい挿し絵をそえました。
- 子どもたちの心を育てるお話の宝石箱。

文・やすい　すえこ　絵・若菜　珪／石倉欣二　他

A4変型判・352頁・定価2,200円(本体2,136円)

世界のお話100

- 子どもたちに読み聞かせてあげたい100のお話(世界版)。アンデルセン、イソップ、ヨーロッパの民話他。
- 文化の歴史が時間をかけて培ったお話が、子どもたちの感情を育てます。
- 美しい挿し絵。読み聞かせしやすい文章の長さ。

文・やすい　すえこ　絵・村上　勉／太田大八　他

A4変型判・352頁・定価2,200円(本体2,136円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館